
鍍金の島（ときんのしま）

李孟鑑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍍金の島
いしづきの島

【Nコード】

N5811S

【作者名】

李孟鑑

【あらすじ】

文武二年（698年）、飛鳥の朝廷に、対馬で砂金が発見されたとの報がもたらされた。

日本国で初めて、金が産出されたのである。

思いがけぬ吉事に都は沸き、そして二年後、精錬された金が無事朝廷に献上された。

しかし、後年編纂された史書「続日本紀」は、この時献上された金は偽物であったと記す。

精錬のため対馬に遣わされた職人、三田五瀬。彼が仕組んだ詐偽で

あつたと、歴史は伝えるが……。
金発見の裏に隠された、飛鳥史の影の物語

第一章 三田五瀬（一）

工房で働く三田五瀬みたのいつせの元に客があつたのは、厚く垂れ込めていた雲が数日ぶりに吹き払われ、色あせた空が寒々と凍てついた朝のことだった。

客とは、三田の氏上（ 1 ）で、二里余も離れた忍海郡の村から、わざわざこの飛鳥まで出向いて来たのだった。

「何でも、お主に話があるらしい」

氏上の来訪を告げた職人仲間が、襟をくつろげながら言った。ひさしぎわの土間に炉が八つも炎を上げているために、壁板がないにも拘らず作業小屋は季節を間違えたように熱かった。炉はそれぞれ小ぶりのるつぼを抱いている。るつぼの中には銀色の、粘土状の物がどろりと溶け、これは鍍金とぎんに使用する金と水銀の合金である。小屋の真ん中には銅の金仏が鍍金を待つて鎮座している。三田氏は、こつした鍍金、つまり金のメッキ加工から、金細工、金鋳の精錬といった仕事を代々の業として来た鍛戸かめちへの一族であった。

五瀬は様子を見ていたるつぼから、顔を上げた。何であれやりかけた仕事を中断されるのを彼は好まなかった。来客と聞いた時は、どうしても良さそうな相手ならば居留守を決め込もうとも咄嗟に思ったのだったが、氏上ではそういうわけにはいかない。手にしていた道具を傍らに置き、五瀬は立ち上がった。長おさは、下の井戸の所で待っていると言つ声を背中に聞きながら、顔の汗を拭いつつ、小屋を出た。

表には朝の陽を浴びて既に雑然とした光景が繰り広げられていた。

屋根掛けしただけの簡素な小屋が乱雑にひしめき、中では職人たちが、ある者は炉に向かい、ある者は道具を磨き、各々の作業に没頭している。建て込んだ小屋の間には石やら土くれやらが積みれ、ただでさえ狭く入り組んだ空間を殊更に複雑にしていた。その狭い中を、職人たちの行き来がせわしかった。

ここは朝廷直轄の巨大工房だった。蘇我馬子の建立とされる古刹、飛鳥寺の南方に、二つの尾根に囲まれて緩やかな谷あいがある南北二町（二百m）に渡って伸びている。そのほぼ全体を使って工房が営まれ、金銀を始めとする金属の鑄造、細工や、瑠璃（ガラス）、瓦の製造などが、役人の指揮の下で大規模に行われていた。この地に工房が置かれたのは五十年前、大化改新を行った天智帝とその弟天武帝、この両帝の母である斉明女帝の御世に遡る。当時女帝は、飛鳥に大掛かりな都城を築くべくもくろんでいた。都の造営には瓦などの建材を始め様々な物品が大量に要りようになる。そうした品々を迅速に生産し、かつ納めさせるため、女帝は都から程近いこの谷あいを選んで整地し、職人を集めたのだった。いわばこの谷地は官営の一大工業地と言ってよい。

小屋や人の間を縫いつつ斜面を下りきると、そこは小さな広場になっっている。共用の井戸が設けられ、石を敷きつめた井戸端に、水を汲んだり汗を拭ったりする屈強な男たちに交じって、岩に腰かけた氏上の、しなびた茸のような姿を五瀬は認めた。

「典鑄司いものつかさの役人に呼ばれて、明け方着いたばかりだ」

五瀬の姿を見るなり、氏上は愚痴った。典鑄司とは大蔵省の被官で、金属の鑄造、瑠璃・玉くわくの製造などを司る。三田氏も金を扱一族であるから、当然この典鑄司の配下に置かれていた。

「今日の昼頃行くようにするとわしは言ったのだが、昼は繁忙ゆえ朝一番に來いとぬかしおつてな。仕方がない、膝に鞭打つて夜歩きして來たわ。あいつら、己の都合しか考えよらん」

「長、おれに話とは何だ」

氏上の愚痴は放っておけばいつまでも続きそうだった。話を早く済ませようと、五瀬は氏上の口を遮って訊いた。

「おう、そのこと、そのこと」

促されて、氏上は本来の用事をようやく思い出した。膝を手のひらでぽんと打つと、

「そのことだが五瀬、お主対馬へ行つて來い」

唐突に告げた。

「　　ツシマ？」

呆氣にとられて五瀬はおうむ返しに訊き返した。

「対馬と言つたか」

「ほれ、東あづまより男どもが防人に行つておろうが。あそこだ」

「いや、それはおれも知っているが」

「金を鍊る者が欲しいそうだ。なんでもその対馬で金が出たのだとか」

氏上によると、ひと月ばかり前のこと、対馬の嶋司（ 2 ）より、彼の地で金が発見されたとの報が、都にもたらされたのだという。

この国には金は存在しないというのが、歴史始まって以来の、人々の共通の認識だった。確かに川底の砂から砂金が採取されることもないわけではなかったが、しかしその量となると、お話にならぬほど微々たるものだった。金細工など宝飾に用いる金は、これまで全て、大陸との貿易で賄って来なければならなかったのである。

その、存在しないはずの金が発見された。この思いがけない吉報に、朝廷は文字どおり沸き返った。

発見された地が対馬というのも、人々の高揚を後押しするものだった。対馬とは日本で初めて銀が発見された地なのである。遡ること二十数年前のことで、時の帝、天武帝は、開闢以来の吉事であると喜んだ。銀を献じた嶋司、忍海造おしぬみのみちつしおおくに大國は小錦下の位を授けられるという栄達を得、また神事なども盛大に執り行われた。その時の興奮を覚えている者も今の朝廷には少なくない。銀の発見された島で、今また、銀よりもさらに尊い金が発見された。藤原京の人々がそこに、人知を超えた神の啓示を見出したのも無理はない。朝廷はすぐさま、金を精錬させるため職人を対馬へ遣わすことを定めた。責任者は大納言おおとものみゆき大伴御行が任じられた。

「しかし……」

どう答えたものか、五瀬は言いよどんだ。朝廷を覆っている歓喜も高揚も関心の外である。氏上の話に彼はただ当惑を覚えただけだった。はたちを迎える今日まで、五瀬は大和を出たことはもちろん、虐待を恐れてよその郡にすら足を踏み入れたことはない。生まれ育

つた三田の村と、労役のため通うこの谷の工房とが世界の全てと言つてもよかつた。そんな彼であるのに、いきなり、そもそも何処にあるのかも知らぬ対馬とやらに行けと言われたのである。

「長」

「お主は腕が良い」

氏上はしかし、五瀬に何も言わせなかつた。既に役人の方には、五瀬を推挙してしまつている。

「それに体が丈夫ゆえ船旅にも耐えられよう。左様なわけだ、工房を片づけてすぐ村に戻つて来い。出立の仕度をせねばなるまい。よいか、わしはお主に伝えたぞ」

頭を押さえつけるように言い重ねられて、五瀬は渋々頷かざるを得なかつた。

「おれが抜けた分はどうなる」

「そうさな。糟麻呂あたりを明日にでもよこすでしょう。皆はよくやつておるか」

飛鳥に来たついでにと、氏上は工房にも顔を出して行きたい様子であつたが、五瀬は今は鍍金の仕事をしていて年寄りには毒だからと、氏上を止めた。

鍍金は前述のとおりメッキの作業である。金をかぶせたい金仏などに、あの、るつばで溶けていた金と水銀の合金を塗る。冷え固まつたのちに炭火であぶるとやがて表面は銀色から金色に変わる。合

金のうち沸点の低い水銀が先に蒸散し金だけが残るといふのがその仕組みなのだが、しかし水銀を蒸気にして飛ばすのだから、職人はそれをそのまま吸い込むことになる。危険の伴う作業であった。

「ふむ、そうか」

氏は頷き、蛙のようにたるんだ咽を上下にひくつかせて足元に痰を吐いた。

「なら、わしはこのまま帰るとしよう。皆にはお主から言うておいてくれ」

それだけ言つて、氏は背を向け来た道を戻つて行つた。冬の乾いた土の上に、痰の塊が妙な白さでへばりつき、残された。坂道をとぼとぼと行く老いた背の上に五重塔が、朱塗りの体に黒い甍を幾重にもまもつて天を衝いている。飛鳥寺の五重塔であつた。

五瀬は堀越しに飛鳥寺の境内を見たことがあつた。広い境内は隅々まで下草が払われ平らにならされ、そのため五重塔などは特に、地中から唐突に生え出たかのようなだつた。五重塔と三つの金堂を回廊が整然と囲み、五瀬が見た時はその掃き清められた石だたみを一人の僧が歩いていた。それはまだ少年の僧で、年の頃は恐らく五瀬と同じ程であると思われた。僧衣の裾を柔らかく乱し、しかしその眼は何ものにも乱されず凜々とした歩みを運んで行く様は、求道と悟りの空間に如何にもふさわしく映つた。

場所こそ接していながら、五瀬の働く工房の猥雑さとは何と違うであつただらう。まさに別世界だと五瀬は思い、しかしすくなくいやそうではないと思いをひるがえした。

『別世界なのはむしろ、おれがいるこの谷あいの工房の方だ。おれたち雑戸しゅうこは、良民であって良民ではない。人でありながら人ではない。そんな連中の集う場所が当たり前の世であろうはずがない。いわば美しい都の中にぽっかりと開いた異形の世に他ならぬ』

工房が置かれたのは数十年の昔だとは、五瀬も聞いたことがある。その時からずっと、雑戸の民はこの谷で労役に明け暮れて来た。多くの人間が集まり喧騒が溢れているというのに、ここには市のような華やかさはない。常にどこか空々しい静けさが漂っているのは、労役に駆り出された者たちの苦痛が、目に見えない沈黙となつて、ず高く積もっているためではあるまいか。

五瀬は高みからこちらをじつと睥睨へいげいする五重塔へ目を上げ吐息を洩らした。見上げるまなざしの中に、若い血のたぎりと澄んだ陰鬱とが不器用に交じり合った。

第一章 三田五瀬（一）（後書き）

- 1 うじのかみ・一族の長
- 2 しまのつかさ・国司と同意

第一章 三田五瀬（二）

* * * * *

大化改新以前、社会には部民と呼ばれる人々が存在した。朝廷や皇族、豪族の私有を受けた隷属民である。皇族の部民は名代、子代という。豪族の部民は部曲かきへである。共に直轄地の耕作などの労役を担った。また職業部民と称される人々は、主に朝鮮など大陸から渡来した職業集団であった。鍛冶や陶作りといった手工業の技能を有し、朝廷に属して生産物を貢納した。

その部民制が解体されたのは大化元年のことである。時の孝徳帝は詔を発し、国の土地、及び民はただ帝のみに属すると定めた。豪族に土地や民の私有を禁じた法令であり、これにより名代、子代、部曲ら私有民はその隷属的身分から解放されることとなった。しかし、この法令の意図したものは、部民に自由を与えることでは決してなかった。豪族に民の所有を禁じる一方、朝廷は一部の職業部民を改めて組織し、自らの管理下に置いたのである。これが雑戸の民であった。

この時雑戸に組み入れられたのは、甲作よろこびへり、弓削ゆげ、または馬飼といつた、武器製造や軍事に関わる技術を有した人々だった。大化改新と呼ばれる一連の政治改革で孝徳帝と皇太子中大兄皇子（のちの天智帝）が目指したのは、唐のような律令国家の確立であった。すなわち各豪族の力を削ぐことでそれまで有力豪族の集合体であった国のあり方から脱却し、代わって皇家が強大な権力の下に国を治めるという、中央集権型の国造りである。

力をもって並み居る豪族を押さえつけるためには軍事力の独占が

不可欠となる。既に述べたように職業部民には百済や新羅など技術の進んだ大陸からの渡来人が多かった。つまり軍事の職業部民を掌握することはそのまま大陸の新鋭の軍事技術を占有することであり、朝廷の目指す国造りには欠くべからざる要素だったのである。

しかしそのために、雑戸の民は差別的な束縛を強いられねばならなかった。職業は世襲のもの以外に就くことは許されなかった。戸籍は一般良民とは区別され、「雑戸籍」という特殊な戸籍の下で身柄を厳しく管理されていた。一般民なら有し得るはずの様々な自由が、雑戸民にはなべて許されなかった。社会制度上でこそ、雑戸は奴婢でも賤民でもなくあくまでも良民に入れられていたものの、しかしその身分の実態は良民の中でも最下層に位置づけられており、在り様は奴婢と変わるところはなかった。

こうした奴婢同然の隷属を雑戸民が受けるに至ったのは、血の賤しさゆえでも、罪の穢れゆえでもなく、ひとえに身につけていた技術が権力者にとって有益であったからに他ならない。しかしそうした認識は雑戸自身も含め誰も持つてはいなかった。人々の目には長年に渡り雑戸が社会の最下層に置かれ隷属民に甘んじて来たという事実のみがあった。そしてその純然たる事実が、雑戸民の中には卑屈さを、取り巻く人々の中には蔑みを、深く植え付けて来たのだった。

五瀬もまた、自らの成り立ちについて知ることもなく、三田一族も含めた雑戸民が、何故に下層民に貶められているかも考えたことはなかった。彼はただ繰り返される日常の中で、人々が自分たちへ向ける侮蔑を肉体でもってじかに受け取っただけであった。

五瀬の中に一つの記憶がある。その記憶は少年の五瀬の心に深く染み透り、今も古い血のように黒く凝ったまま胸の底に沈んでいた。

それは五瀬が十五を迎えた持統天皇七年（六九四）のことで、夏の日射しがそろそろ弱まりだした晩夏であった。鳥を獲る罾の様子を見に出かけた五瀬は、山に向かう途中の道すがら、折悪しく隣村の穴見の少年たちに出くわした。彼らは五瀬を見つけるや、猿のように群がって来て、取り囲んで道をふさいだ。

「五瀬、何処へ行く」

頭領格の磐来いわかという少年が仁王立ちに立ちふさがった。五瀬はむつつりと突っ立ったまま口をきこうとしなかった。三田村の子供たちは幼い頃より、良民の子供　つまり雑戸ではない村の子供ということだが　とは厄介を起こすな、腹の立つことがあっても言い返してはならぬ、まして喧嘩などしてはならぬと厳しく言われていた。それに五瀬は、この同い年の少年の、小石を二つ置いたような表情の乏しい目を以前から嫌悪していた。五瀬がちらと浮かべた表情を敏感に読んだのか、磐来はやおら手を伸ばし五瀬の衣をぐいと驚掴みにした。

「おい、奴婢がこんなものを着ていいのか。つるばみと決まっておろうが」

「黙れ、おれは奴婢ではない」

奴婢と言われて五瀬はかっとなった。大人たちに言われたことも忘れて怒鳴り返した。

ちょうどこの年の一月、朝廷より衣服令が出され、百姓は黄の衣を、奴婢はつるばみ（１）の汁で染めた黒衣を、それぞれ着用することが定められたばかりだった。黒とは凶服（２）の色であり、穢れを象徴する色でもあるから、黒色をまとうとは、奴婢が穢れを

負う者であることを意味する。

奴婢の身分は古くからあったが、しかしこれを穢れとみなすようになったのはそう昔のことではない。それは天武天皇十年（六八一）宮中にて行われた大祓に遡る。この時は帝の穢れを払い長寿を祈る祭儀が行われたのだが、災気や罪穢を移す形代として、豪族より納められた奴婢が用いられたのだった。奴婢を賤、穢れとする觀念が社会に明確に形作られたのはこの神事に端を発するのである。のち、持統天皇三年（六八九）に頒布された「飛鳥浄御原令」では、奴婢の身分を賤民とすることが明文化された。黒衣着用の法令とは、奴婢に身分標識を負わせることであつたが、同時に、穢れを担う、人ならぬ者としての立場を更に明確にしたものとも言える。

奴婢にとつて衣服令は屈辱的だつたが、雑戸の子供たちにとつてもまた腹立たしい法令だつた。嘲弄されるねたが一つ増えたためであつた。他村の子供は雑戸を見つけると容赦なく、奴婢が来た、奴婢は黒衣を着けよと言つて嘲つた。そうして奴婢と呼ばれることは、雑戸の民にとつてこれほど忌まわしく厭わしいことはなかつた。自らも虐げられる立場にありながら、雑戸民の内には奴婢に対する如何なる同情もなかつた。あるのは、たとえ下層民でも自分たちは良民であり、賤民の奴婢とは違つという優越であつた。そして自分たちに向けられる以上に激しい、奴婢への侮蔑と嫌悪の感情であつた。

「黙れ。おれは奴婢ではない」

五瀬は怒鳴り返したが、その途端、目の前に黒いものが飛んだ。磐来が足元からすくつて投げつけた泥だつた。それを合図に取り囲んだ少年たちは一斉に、磐来にならつて泥を投げつけ始めた。背にも胸にも足にも、体中に泥が飛んだ。誰かが手のひらいっぱい泥水を頭から浴びせた。払おうとして振り上げた腕を押さえつけられ、

顔中に泥がなすりつけられた。目をふさがれ抵抗出来なくなった五瀬を少年たちは寄つてたかつて捕え、歓声と共にぬかるみに突き倒した。

「これで奴婢らしゅうなつたわ」

衣どころか全身を泥で真っ黒にしてぬかるみから顔を上げた五瀬に、磐来は冷笑した。

「分かつたか、奴婢はつるばみを着よ。今度おれたちと同じものを着ているのを見つけたら……」

みなまで、五瀬は言わせなかつた。泥を蹴散らして跳ね起きるや磐来に飛びかかった。不意を突かれて磐来は後ろへよろめき、二人はもつれ合つて足元のぬかるみに倒れこんだ。取り巻きの少年たちは驚いてわっと逃げ出した。五瀬はもがく磐来に馬乗りになり、顔を泥の中にざぶりと押し込んだ。

「磐来、見よ」

五瀬はわめいた。

「泥の黒衣を着た己の様を見よ。おれが奴婢ならお主も奴婢であるうが。どうだ、良民の磐来、お主も奴婢であるうが」

取っ組み合ううちに、穴見の村の大人が先程の少年たちと共に駆けつけた。大人たちの手が五瀬を荒々しく捕えて引き離れた。ぬかるみから磐来が助け起こされるのが見えた。それから皆の目が、風になびくように一斉に五瀬の方へ向いた。無数の目が体を射、まだ荒い息をつきながら五瀬はその目を見て動けなかつた。やがて手が

五瀬の腕をつかみ、近くの林へと引き立てて行った。そして林の奥で、五瀬は大人たちに暴行を受けた。

五瀬は叫んだが、しかしそれは体を殴打する杖や棍棒が恐ろしかったのではなかった。恐ろしかったのは地面に転がされた五瀬をぐるりと取り囲んだ目だった。警来たちの目には嘲りがあった。だがこの大人たちの目にはそれすらなかった。それは侮蔑も残虐も、およそ感情の波立ちというもののない目だった。あたかも土を耕し草を刈るように、大人たちは黙々と五瀬を打ち据えた。そして、手入れの済んだ田を眺めるような平穏な目で、血を流してもがく五瀬を見下ろした。雑戸とはいえ人を一人殴り殺そうとしていながら、大人たちの意識は穏やかな日常の中にとどまっているのだった。そしてそうであるならば、宙に散らばる無数の目には、五瀬の血は見えていないのに違いなかった。この木暗い林の中では何事も起こっていないのに違いなかった。五瀬は恐ろしさに叫び声を上げた。

虐待の手から逃れることが出来たのは、ただ恐怖ゆえであった。夢中で腕を突っ張ると、体の下に草が朱に染まっているのが見えた。背に棍棒が振り下ろされた。新たな血が滴るのも構わず、五瀬は目の前にいた男の腰めがけて思い切り体をぶつけた。人垣が裂け五瀬の体は草の中に勢いよく放り出された。あとは獣のように土をかきむしりながら、遮二無二林の奥へと遁走した。足が進まなくなり灌木の藪を見つけて這い込んだ。顎が震え歯が鳴った。気づいて慌てて衣を噛んだ。胸が早鐘のように鼓動した。殴打された体中の骨が軋んだ。こんなかすかな音すら、聞きつけられはせぬかと恐ろしかった。芋虫のように体を縮めて五瀬は月が天頂にかかるまでそこに潜んでいた。血と泥にまみれ真夜中に戻って来た息子の有り様に両親は驚いたが、何を問われても五瀬は答えなかった。

第一章 三田五瀬(一)(後書き)

- 1 ドングリ
- 2 喪服

第一章 三田五瀬（三）

* * * * *

五瀬にとつて出立の支度は一苦勞であつた。五瀬は旅などしたことがない。村にも大和を出たことのある者は誰もいない。見知らぬ土地へ赴くのにどんなものを荷造りすべきか、乏しい知識を元手に精一杯の想像力を働かせ、とりあえず着物と煮炊きの道具や椀、小屋掛けのために手斧と鉞ちよつなは思いついたものの、そのあとはなかなか見当がつかかなかつた。

「寝わらは要るであらう？」

炉の火に寄つて衣の繕いを手伝つていた母親が訊いた。

「いや、寝わらはさすがにかさが張り過ぎる。向こうで誰ぞに分けて貰ふことにする」

「払うものはあるのかえ」

「長の話だと、郡司の館様から多少の布が出る。向こうにいる間の米も貰えるそつだ」

郡司とは国司の下で郡を治める地方官であり、要は古くからの有力豪族である。徴用されても朝廷からは食料も錢も支給されないため、そつした面倒は皆国許の郡司が見ることになっていた。自分の米よりも、五瀬は耕し手のなくなる家の田畑のことが気に懸かつた。

「田は貸すことにするよ。わたしら二人だけなら、耕し賃を払つて

も食うには困るまいし」

少々投げやりな口調で母親は言った。五瀬からは針を持った手が見えるばかりで、表情は影になっている。都には荘厳な宮殿や寺が並び建っていたが、民の住まいは古墳の時代からほとんど変わっていない。未だに土を掘り下げた上を茅の屋根ですっぽりと覆った、竪穴の小屋であった。窓がないため火を燃やしても中はひどく暗い。影の中に母親の不安げなため息が小さくした。持つて行って差支えない鍋はないかと訊くと、ぶつきらばうに鍋もこしき（も一つしかないと答えた。と、小屋の隅で寝わらに横たわっていた父親が頭を動かし何事か言った。不明瞭でほとんど聞き分けられない声音だったが、共に暮らしている五瀬と母親には、構わないから鍋を持たせてやれと、そう言ったのが分かった。荷をまとめていた手を止め、五瀬は父親のそばへ寄った。

「いいよ。鍋がなくては困るだろう。おれなら近所で穴の開いたのを譲って貰って、直して持つて行く」

体の脇に力なく投げ出された手を取って、五瀬は肘から指先まで丹念にさすってやった。

「頭の痛みはどうだ」

問いかげに、父親は青黒い顔をかすかに振って、今日は調子が良いと言った。父親の麻痺した手は肌が冷えきってずしりと重たく、鉄の塊を手のひらに乗せているように感じられた。こうした病は、三田一族の男たちには珍しくはなかった。水銀や鉛のためである。鍍金の作業に水銀を使うことは既に述べたとおりであるし、金の精錬を行う際には鉛を使った。

長年に渡って有害な金属を扱い続けるため、鍛戸の体には年を追うごとに頭痛や嘔吐、呼吸不全を始めとする様々な症状が現れる。例えば氏上などは運良く片手が少々麻痺した程度で済んだため、ああして飛鳥まで歩いて来ること出来るが、大抵は目の前で横たわっているこの父親のように、手足を動かすのも言葉を発するのも不自由になってしまふ。そしてこの中毒症のために、三田の男たちは多くが短命であつた。

『いずれはおれも親父殿のようになるのだ』

五瀬は思わずにはいられない。寝わらに横たわって指すら思うように動かせずにいる姿、またそうした不自由な日々の明け暮れの後にようやく訪れる死、それはそのまま、五瀬自身にも間違いなく約束された未来であつた。とは言え、若い五瀬の心には、老いも死もまだ生々しい形で染み込んで来てはいない。悲劇の予感を官能にも似た甘美な痛みとして享受出来るのは、若さゆえの特権だつた。

翌日、村の広場に供物を乗せた祭壇が設けられ、五瀬の旅の無事を祈る祭りが行われた。村人が打ちそろい、鳴り物をにぎやかに鳴らす中、麻の白衣を身につけた氏上が進み出た。祭壇の向こうに、布で飾られた大きな柱が立てられてある。神や先祖の霊が下る神柱である。表に人面を刻み込んだ、見ようによつては一種異様な柱に氏上は向かい、うやうやしくぬかずいた。

よその村の者が目にしたならば間違いなく奇異に感じるであろうこの祭りは、朝鮮の祭りなのだつた。職業部民に朝鮮からの渡来人が多かつたことは既に述べたが、三田氏もまた、遠く任那みまなに起源を持つ渡来の民なのである。

任那は六百年程前に、朝鮮半島南端に起こつた国だつた。任那の

祖は名を金首露キム・スロといい、天の命を受けて龜旨クジの峰の頂に天降つた者であつた。金首露と、彼と共に天降つた五人の兄弟はそれぞれに国を開いて互いに同盟し、長兄の金首露が盟主となつたと、国の起りを建国神話はそのように伝える。六伽耶、または伽耶諸国と称されるこの国は、六カ国の同盟とは言うものの国土も勢力も国の歴史を通して小さかつた。しかも時を経るうちに東方には新羅、西方には百済が勃興し、二つの強国に挟まれた小国は侵攻に脅かされた。ついに百済武寧王十二年（五一二）、百済に牟婁ムル以下四県を奪われ、次いで残つた領土も新羅真興王二十三年（五六二）に新羅に併合され、任那及び六伽耶は地上より姿を消した。六伽耶の人々は敵国の迫害を恐れ、当時同盟関係にあつた倭国に難を避けた。任那の民であつた三田氏が大和に根を下ろしているのはこうしたいきさつによる。

神柱に幾度かぬかずき、それから氏上は天を仰いだ。咽を膨らませ大声で祝詞を唱え始めた。鳴り物の音が一段とにぎやかに高まつた。楽音は木々の枝を震わせ、朗々たる祝詞の声を天へ向かつて押し上げて行くようだった。祭りのたびごとに唱えられるこの祝詞は、遠い昔、故国任那で唱えられていたものが連綿と伝えられて来たのだと言われていた。少なくともそのように一族の者たちは信じていた。しかし確かめる術はない。三田氏が大和に流れ着いてから既に百有余年の時が経つていた。任那の言語を解する者はもはや誰もおらず、祝詞の意味するところも分からなくなつていた。三田の人々はこの祝詞を言葉としてではなくただの音として口でなぞり、伝えて来たに過ぎない。

言葉も歌も踊りも祭りも、任那の風習は長い年月の中に皆うずもれた。いわばこの異様な祝詞のみが、異国の地で虐げられて生きる三田一族の手に残つた、唯一の故国の記憶であつた。氏上の唱える祝詞は冬の空を遠く響いた。独特の抑揚は時に、一種の哀感を伴つ

て、聞く者の耳に届いた。そして帰るべき拠りどころを持たぬ寂しさを人々が感じずにいられないのは、この時であった。

* * * * *

対馬への出立はひと月後と決まった。朝廷の出先機関である九州の大宰府へ使いの船がひと月ののちに出る。その船に五瀬は典鑄司の役人共々、同乗することになった。旅の仕度を整えて飛鳥に戻り、五瀬はるつばや炭、鉛といった精錬に必要な諸々を取りそろえ、荷造りする作業に追われた。幸いにもこの時期畿内は好天に恵まれ、船は予定通りの日程で、難波津を出船した。甲板上には下帯一つになつた船乗りたちの遅しい体がきびきびと動き、小気味のよい掛け声を沸かせて船は内海の穏やかな潮を切つて進んだ。

五瀬はというと、積み込まれた様々な荷と共に船底の倉庫に押し込められていた。

『おれは炭と同じか』

自らがたずさえて来た大きな積み荷の間に挟まれながら五瀬は憤つたが、しかしそれも長くは続かなかつた。生まれて初めて船に乗つた五瀬は、船が港を出ると幾らも経たぬうちに激しい船酔いに見舞われた。悪い酒を飲んだ時に似ていたが苦しさはその比ではない。底板が波のうねりを受けるたび、胃の腑どころか心の臓からも吐き気がこみ上げる心地がした。日も射し込まぬ中、床に多少の隙間をさぐりあて何とか体を横たえてみたものの、船の揺れが全身にくまなく伝わるせいか体を起こしていた時よりもなおあんばいが悪い。五瀬は長いこと、床に転がったりまた起き上がったりを繰り返していたが、とうとう辛抱出来なくなり這うようにして船底から甲板へ出た。

船べりに寄り掛かったはずみにはらわたが痙攣し、腹の中身がどつと海中めがけて吐き戻された。揺れに任せて二度、三度と嘔吐するうち、ようやく多少楽になったようだった。荒い息をつきながら五瀬は甲板に転がった。仰のいた目に洗ったように白い雲が流れた。火照った顔に潮風が当たった。風の冷たさに心地よさを覚えていると

「おい、雑戸」

いきなり腰の辺りを足蹴にされた。目だけ動かしてみると仁王立ちになった赤銅色の体がこちらをねめつけていた。

「こんなところで寝るな、邪魔だ」

「気分が悪いのだ」

腹を立てる気力もなく、五瀬は船乗りに弱々しく懇願した。

「腹がむかついて気分が悪い。頼むから少し風を吸わせてくれ。お主の邪魔はせぬ」

「たわけ。言うとするそばからもう邪魔になつとるわ。下に戻れ。戻らんと海へ放り込んで魚の餌にするぞ」

仕方なく五瀬は立ち上がりまた船底の倉庫へと体を引きずるように戻った。そのまま一日中床を転がって過ごし、頃おいを見はからつてそろそろと甲板に上がってみると、外は既に夜になっていた。

船人はもう皆休んだとみえ、碇泊した船の上は何処も静かであった。見上げれば黒く塗り込めた空に、鑿でもって打ち抜いたように

十三夜の月が黄金色の光を放っていた。甲板には長々と、帆柱の影が流れた。五瀬は船べりに寄った。夜の闇を吸って黒く光る海水の向こうに、背後に灌木の低い茂みを背負って砂の浜が伸びていた。寄せる波にならされて、浜は布を引いたようにどこまでもなめらかだった。しかし目で追ううちに、五瀬はその平穏な砂の中にひとところ、人々の集まった痕跡を小さく認めた。焚き火らしき跡があり、周囲の砂が複雑に踏み荒らされているのを、月の光がくまどった蒼い影が五瀬に教えた。この近くに浦里があるのだろう。村の男女が集まり歌垣にでも興じたのだろうかと思ひ、思つうち、五瀬は生まれて初めて、旅愁というものを胸の内に感じた。

船底で積み荷に押しつぶされる昼と、船人が寝静まった甲板で一人思いにふける夜とが交互に過ぎ、船は明石の浦、風早の浦、熊毛の浦といった幾多の港を経つつ西へ進んだ。筑紫の那大津で船を乗り換え対馬の隣島である吉岐へ、そこから更に波を渡つてようやく対馬の与良の津^{ゆら}へ船が入ったのは、難波津を発つてから実にふた月余のちであつた。気がつけば、氏上の口から対馬の金の話を聞いた時には冬であつた季節はいつしか初夏に変わり、行く人でにぎわう与良の津には、潮の香りがすがすがしかった。

(第一章・了)

第一章 三田五瀬(三)(後書き)

米を蒸す蒸籠

第二章 奴婢の三船（一）

持統^{じつじう}太上天皇は、天智帝の娘であり、天武帝の皇后であつた婦人である。今上の文武帝^{もんむ}には祖母にあつた。その持統は自室でふと目を開けた。そして目を開いてみて初めて、彼女は自分が文机にもたれたままいつしかうたた寝をしていたのに気がついた。明かり取りの窓から射し込む陽光が背を温めていた。文机に広げた書物の上にも、日は斜めになつて落ちてゐる。影の様を見るに、眠つていたのはほんのわずかの間であつたのだらう。机の隅にのつた腕に持統は手を伸べた。先程女官に言いつけて湯を持つて来させたきり手つかずになつていたのである。今しがたまで彼女を包んでいた眠りの快さが溶け入つたように、腕の湯は温くもなく、かと言つて冷たいという程でもなく、けだるい具合にぬるんでいた。

このように心安らかな眠りは持統にとってほとんど記憶にないものだった。亡き夫、天武と共に国を切り回し、気を張りつめていた頃はもちろんのこと、無知という殻に守られて世の憂さとは無縁だつた幼い頃にまで遡つてすら、安らかな眠りというものとは縁遠かつたように思われる。しかしこの一年ばかり、書見をしたり、または書きものをしたりといった合間に、やわらかな泥に沈むような快い眠りに引き込まれることが、持統には多くなつていた。

太子に無事皇位を譲り、安心したのは確かだった。ずっと張りつめていた気持ち知らぬ間に一度に緩んでしまったのかもしれない。しかし、この頃の変調はただそれだけによるものであるのか。持統は再び腕のふちに唇をあてた。丁寧に使ひ込まれた飴色の腕が木肌のなめらかな口ざわりを伝えて来る。冷えるのも構わずとるとと湯をすすっていると

「あの、皇太后様」

背後に女官の声がした。本来ならば太上天皇と呼ばれるべきだが、音の物々しさを嫌って奥仕えの女官たちは皆、持統を相変わらざるのように呼んでいた。女官は一礼し、帝が参られておりますと告げた。やがて眉目の涼しげな細面の顔が戸口に見えた。文武帝である。鳳凰紋を織り込んだ松葉色の袖を揺らして入って来、会釈をして持統の傍らに腰を下ろした。

「御祖母様、お目覚めにございましたか」

優しい微笑を浮かべた。

「実は先程一度参ったのです。しかし文机にもたれてお休みになっておられたので、出直すことに致したのですよ」

「おや、女性の寝顔をのぞくものではございませぬよ。帝もお人が悪いこと」

「冗談まじりにたしなめて、持統は声を立てて笑った。そうしていると小鬢に白いもののまじる年とは思われない。笑顔も笑う声も驚くほど若やいで、可愛らしくすらあった。即位して間もないこの愛孫といると、持統は心が春日に満ちたように浮き立つのであった。

文武の即位は持統にとって長年の悲願だった。もともと彼女が望んでいたのは、息子、草壁皇子の即位だった。夫への働きかけで首尾よく立太子したものの、しかしその草壁は、父帝が薨去しその殯もがりが済んで間もないうちに、急な病を得てしまっただった。愛息の死を悲しむいとまもなく、持統は草壁の嫡男、軽皇子かるのみこに息子の果たし得なかった夢を託した。自身の血を受け継ぐ者が皇位

に上ることを、持統はどうしても望んだのである。自ら夫の後継として即位し、国をまとめつつ孫の成長を待った。そして軽が十三才になった持統天皇十一年（六九七年）、持統は譲位した。軽皇子は文武帝として即位し、持統女帝は太上天皇として帝の補佐役に就いた。つい二年前のことである。

「今年の祖のことですが」

文武は伸びやかな声で言った。

「ここしばらく行幸が重なり、警護の兵士らの国元では働き手を徴収され難儀しているとの声が届いております」

「作物が穫れていないのですか」

「試みに幾つかの郡に人を出しましたが、やはり荒れた田畑が目立ったと。それで」

今年は行幸に供奉した兵士の調と役を免じたいがと、文武は持統に提案した。

「よろしきお考えと思いますよ」

すぐに持統はうべなった。それから彼女は、帝、と口調をやわらげた。

「わたくしの判断をいちいち仰ぐ必要はないのですよ。無論わたくしならばいつでもご助言申し上げます。けれど善きこととおぼし召したなら、重臣らと話し合って御自身の裁断でなさいませ。帝は既に立派に政を執っておりますよ」

持統に褒められて文武は嬉しそうに頬を赤らめにこりと微笑んだ。その表情は帝といえどもやはり十六の少年である。胸の内のほとびる思いがして、持統も思わず祖母の顔つきになった。両の手で孫の頬を挟み優しく撫でた。

こうやって文武の面輪を間近に見つめると、持統の胸には限りない愛おしさが湧き上がる。持統が文武に愛情を注ぐのは、ただ愛息の遺児であるというばかりではない。その面立ち、背の丈、少し強すぎる感受性。文武は十年前に失った息子草壁に生き写しなのだった。年ごとに父の似姿に成長して行く文武を、持統は驚きすらもって見つめたものだった。数年前の冬、持統は文武を連れ阿騎野に遊獵を行ったことがある。この阿騎野は草壁が生前しばしば狩りに遊んだ地であった。文武はまだ十であったが、小さな背に韌ゆきを負い、弓を手に馬にまたがったその姿には、草壁の鮮やかな影が重なっていた。持統はこらえ切れず涙をにじませた。

持統は時折、もしかしたら草壁が死んだことは夢だったのではなかったかと疑うことがあった。また、もしかしたら草壁の魂が文武の体を借りて甦ったのではないかと思うことがあった。この理性的な賢婦人にそんな愚かな妄想を抱かせる程に、文武は父に似ていたのだった。

持統は頬から手を放し、今度は額に手をあてた。血の筋が薄青く浮いた白い肌はひんやりと冷えていた。文武は快活なそぶりですり首を振り、その手を振り払った。

「い心配はいりませんよ」

笑みを浮かべて一礼し、部屋を出て行った。後ろ姿を見送る持統

の唇から、覚えず重いため息が洩れた。草壁と文武が似ているのは外見や心根ばかりではない。気がかりなことに体の病弱なことまでも、文武は父から受け継いでいるのだった。妃らに聞くと文武は寢所で時折ひどく寝汗をかくという。微熱を発し眠りの浅いこともしばしばであった。

であるのに、国の現状はこの若い帝に厳しい。即位後、国では疫病、飢饉、干ばつなどの災いが相次ぎ、また各地の村では農民が田畑を捨てて逃亡する事態も頻発していた。これは数年前に藤原京が造営されるにあたり村々から民を大量に徴用したために農地が荒れてしまったその余波が、今もって尾を引いているのだった。

こうした難事が、決して壮健とはいえない文武の細い肩にのしかかっているのである。今は持統が太上天皇として補佐しているが、しかしその持統とても、齢は既に五十を三つ四つ越え、いつ天命が尽きるかも分からない。

持統は眉を上げた。部屋の隅へ立つて行き、櫃から一冊の書物を取り出して来て、文机に置いた。表紙には「近江令」とある。それから机上に開いたままになっていた書物を閉じ、隣にきつちりと並べた。こちらの表紙には「飛鳥浄御原令」と黒々と墨書きされていた。

唐のような律令国家をこの国に築き上げることは、五代前の孝徳帝より連綿と皇家に引き継がれて来た大事業だった。その一つは、強力な権力を有した帝が全ての民、全ての土地を支配する中央集権型の国家体制を確立すること、もう一つは国を運営する上で核となるべき律令の制定だった。

律令制定に最初に取り組んだのは、持統の父、天智だった。近江

令がそれである。しかし天智が心血を注いだにも拘らず、官制など幾つかの法令が施行されたのみで、そのほとんどは草案の段階にとどまって終わってしまった。天智の後を受け、夫、天武が制定を進めたのが、飛鳥浄御原令だった。官位令を制定し施行したところで天武は薨去したが、制定作業は持統と草壁が引き継いだ形となり、草壁が急死した直後の持統天皇三年（六八九）六月に、頒布された。

以来、現在まで十年に渡り施行されているこの飛鳥浄御原令であったが、しかしこれが律令として必ずしも完成されていないことは、持統が最もよく分かっていた。あの時、皇太子の草壁が父帝の後を追うように急逝してしまったその動揺を、持統は抑えねばならなかった。晩年の天武が力を注いだ律令の頒布は人々の中に偉大な先帝の姿を否応なく思い起こさせる。その威光をもって朝廷をまとめるべく、急ごしらえで制定したものだたのである。そのためありていに言えば、頒布されたその中身は、朝廷が制定したものもあれば、詔として出されたものもあり、または唐の法令をそのまま組み入れたものありといった具合に、およそ整合性を欠いていた。

何よりの不備は、浄御原令は、政の規定である令のみであり、刑罰にあたる律を欠いていることだった。前述したように急ぎ取りまとして頒布したため、律を編纂するいとまがなかったのだ。とりあえず唐律を適用することで間に合わせたものの、所詮は異国の法であり、国情に合わない部分も多々あったのである。

今の編纂と律の条文作成の作業は、浄御原令頒布ののちも続けられたが、しかしそれは遅々として進まなかった。そもそも法の制定、編纂とは繊細な作業であり、時がかかるものである。また持統自身が女帝として国政の中心を担うことになったため、そちらに時を割けなくなったという事情もある。それに、法令というものは民に浸透するまでには時間を有する。たとえ国情に合わなくとも、浄御原

令がとどこおりなく施行されていない段階で律令に大きな変更を加えれば、それは世の中をいたずらに混乱させることにもなる。こうした諸事情から、持統は律令制定の作業を延ばし延ばしとどこおらせて来たのであったが、

『もう頃おいではあるまいか』

文武に譲位して自分は政の表舞台からしりぞいた。始めのうちこそつききりで補佐してやらねばならなかった文武もいつしか頼もしくなり、政を執ることにもすっかり慣れた。あとは、補佐は重臣らだけでよい。自分のなすべきことはもはや今上帝の後見ではない。すなわち国の仕組みを整えそれを全て明文にすること、律令を完成させることである。自分が死んだのち、そして万が一文武が病で政を執れなくなるようなことがあった時、誤っても国が混乱することはないようにしておくのだ。いや、これはただ文武のためばかりではない。次の帝、またその次の帝、何代にも続いてゆく皇家のためなのだ。

文机に並べてある近江令と飛鳥浄御原令、二つの表に、持統は手のひらをそつと乗せた。日射しを受けて人の肌のように温もっている。天智からは血を、天武からは愛を、持統は受けた。この二人の偉大な英傑の遺業を継ぎ、全うさせるのは己でなければならぬことを、持統は知っている。

第二章 奴婢の三船（二）

* * * * *

草いきれの残る間に疲れた体を横たえ、五瀬は空を眺めていた。対馬の空は青い。空に変わりはないはずだが、飛鳥の工房で見ると、三田の村で見ると、対馬の空は青みが強いように思われた。乳汁のような雲がゆつくりと空を渡った。地面に体を投げ出し空を見上げるたび、五瀬の目には、飛鳥の谷で五瀬たちの近くに構えていた瑠璃玉の工房が重なった。

五瀬は瑠璃玉作りの風景が、何となく好きであった。自分の仕事があくと、工房に訪ねて行つては、瑠璃玉の作られて行く様子を子供のような熱心さで見入っていた。

瑠璃の飾り玉は、焼き固めた粘土の型に、溶かした瑠璃を流し込んで作るのである。るつぼの中で瑠璃が溶けると、粘土板の上にならずりと並んだ小指の先ほどのくぼみに一滴ずつ、溶けた瑠璃を落とすしていく。くぼみの中心にはそれぞれ細い金属の棒が立っており、ここがあとで紐を通す穴になるのだ。流し終わると冷え固まるのを待つ。眺めるうち緋色に燃えていた瑠璃はしだいに冷め、冷めるに従つて玉の表面には色が浮かんで来る。乳白色、褐色、黄、緑、色は幾つもあったが、好まれているのか、目に沁みるような紺青色の玉が最も多かった。

型から外すと丸い瑠璃玉が次々とこぼれ落ちる。半円の型から真円の玉が出来上がつて来るのが、五瀬には不思議でならなかった。

「ほれ、染み出た木の脂やにが丸いまま固まつておるだろう。同じこと

だよ。瑠璃も粘りがあるからな」

瑠璃職人は型から外した玉を一つずつ陽にかざしながらそう言った。そしてひびの入ってしまった玉を一つ、五瀬にくれた。指先でつまんで五瀬は目の上に青い瑠璃玉をかざした。まだ磨きのかけられていない玉は表面がざらつき曇っている。小さな玉の中に霧が立ち込めているようだった。真ん中の紐とおしの穴から枝分かれして二本、蒼いひびが道のように走っている。人もまばらな小道が、伸びて霧の中へと消えて行く。小指の先ほどの瑠璃の中に一個の風景が封じ込められているかに見えた。

五瀬は玉を舌の上に乗せ、そっと舐めてみた。固く、ひんやりした肌から、かすかに甘いような涼しさが舌に溶けた。

「そんなものが美味いかね」

「何、美味くはないよ」

瑠璃を転がしながら五瀬は笑った。幼い頃五瀬は枝先につららが下がる、折っては舐めたものだった。始めのうちは火照った口中に冷たさが心地良い。しかしじきに氷は容赦ない冷たさで舌や頬を刺し始め、耐え切れずにいつも途中で吐き出してしまふのだった。あの冷たさと比べると瑠璃の体温は優しくかった。舌にくるまれると大した抵抗も示さずに温もった。そして口を開け風に触れさせると爽やかな冷たさはすぐまた甦った。抗うことを知らぬように見える瑠璃玉の肌ざわりが、五瀬には愛おしく感じられた。

「瑠璃なんぞそれ程面白いかね。わしには、お主らのやっておる金の方がよほど面白いがな。瑠璃は石に落としたら砕けてあつという間に終いだ。つまらぬよ。金は割れぬし、それに錆びもせぬのであ

るう?」

そうして今、対馬の空はあの瑠璃玉のように蒼かった。草の葉や木々の細い梢が風に揺すられ蒼い色の中を漂った。瑠璃職人はああ言ったが、五瀬にはやはり、悠久の輝きを抱く金の美しさよりも、瑠璃の美しさの方が慕わしい。それは瑠璃が宿命的に持つ短命ゆえかもしれない。またはもしかしたら、ただ、この対馬で五瀬が金のために苦勞させられているためかもしれなかった。

* * * * *

対馬は九州の北方の海上、日本と朝鮮半島のちょうど真ん中に浮かぶ孤島である。南北に細長く伸びた島土は、ちょうど中央の辺りで西から海が深く入り込み、陸地は東端の地峡でかるうじてつながっている。島をもう少しで二つにちぎる程に深い、この浅茅あその入り江を境にして、島は北半分が上かみ県郡、南半分が下しも県郡、二つの郡に分かれている。

島はそのほとんどを山林が占め、平坦地に乏しく畑作には向かない。しかしその代わり、山が海に向かつて急激に落ち込む地形が、複雑な海岸線と良質の漁場とを作っている。これらの地理的条件を利用して、対馬の人々は古くから、漁勞を行い、朝鮮半島との交易の中継ぎをして、暮らしを立てて来た。

五瀬の船が着いた与良の津は、下県郡の東岸である。丸く削れた海岸線を両脇から岬の腕が囲む、波の穏やかな入り江である。良港を有する上、港の周囲には対馬には貴重な平坦地が、飯盛山、清水山などに囲まれて広がっている。そのためこの厳原いすはらと呼ばれる与良の津の一带は島で最もにぎわう地域であり、国衙もここに置かれていた。

下船すると五瀬は付き添って来た典鑄司の役人と共に国衙に入った。嶋司に挨拶を済ませると、一人の身なりの良い男が五瀬を待っていた。下県郡の郡司で、五瀬のことは全てこの初老の男に一任されてあるのだという。対馬つしまのあがたくにまろ国麻呂と名乗った。

郡衙は、鶏知けちという、厳原から北へ二里（六km）、浅茅浦のほとりの地にある。再び与良の津から船に乗り、海岸線に沿って北上した。黒い森に覆い尽くされた険しい勾配の連なり、鋸の歯のように複雑に入り組んだ海岸線、引きちぎられたような小島、荒々しい自然の形は五瀬には何もかもが珍しかった。

やがて船は鶏知浦の入り江に滑り込んだ。国麻呂に案内されて五瀬は郡衙に入った。郡衙の周囲は、広い水田が稲の青い葉を揺らし、正倉がずらりと並んで、船上からの荒々しい景色が嘘のように穏やかな眺めが広がっていた。鶏知は鶴岳を源流とする鶏知川が鶏知浦に流れ込み形成した扇状地なのである。小さいながらも土壌豊かな平野であった。

歩きながら五瀬は正倉の数をざっと数えてみた。小さいものも含めると三十ばかりあった。手入れが行き届いているところを見るとどの倉もきちんと使われているらしく、この地の豊かさを示していた。立ち並ぶ正倉群を抜けた奥に、政務が行われる郡庁、それから郡司の館、厨家みくじやなどが集まって建てられていた。厨家の裏手の一角には五瀬が寝泊まりするための小屋が用意されてあった。

「仕事場などはわしらでは勝手が分からぬ。お主で建ててくれ。場所は好きに使って構わぬし、人手も貸す」

工房は屋根をかけるだけで済むので手間ではない。それよりも携

えて来た荷を置いておく倉が要りようだった。五瀬がそう言うつと、
「それならばほれ、向こうに見えておるあれを使えばよい。樫根から運んで来た砂金を入れてあるのだがな。共々にしておけば仕事がしやすかるつ」

対馬県国麻呂はそう、のどやかな声で言った。対馬県氏は古墳時代から対馬を治めて来た土豪である。アマテラスとスサノオが契つた時、アマテラスの勾玉から生まれた男神、アメノホヒを祖とし、その神秘的な成り立ちにふさわしく、一族のうち対馬^{つば}部氏は鹿^{しか}、亀^{かめ}などの卜占に長け、朝廷に占いの技能者を何人も出仕させていた。

そして国麻呂もまた、牧歌的な古代神話の匂いをその風貌に残した男だった。まぶたが厚く、豊かに盛り上がった鼻梁の下に灰色がかつた髭をたくわえているところなどは、どこか古木の幹などを思わせた。厳原の国術で初めて会った時、五瀬はただ温厚そうな年寄りと思っただけだったが、対馬の急峻な山々を眺めたあとで改めて見ると、深淵な山の姿がそのまま刻み込まれた面貌にも思われ、何とはなしに感心した。

翌日から、五瀬は人手を借りて工房の建設にかかった。小屋の周り以外は木も草も手を付けられておらず、そこから始めなければならなかった。邪魔になる木を切り倒し、根を掘り起こし、地ならしをする。それが済むと穴を掘って柱を立て屋根の骨を組む。聞けば対馬は雨が多いとのこと、助言に従い屋根は萱でもって厚くふき上げた。作業場となる場所は下草を払い、土を丹念に突き固めて炉を掘った。

工房が仕上がる頃、一人の男がやって来た。助手となるべき者が

一人欲しいと、国麻呂に頼んでおいたのである。しかし、ひと目見て五瀬は眉を寄せた。男はつるばみの衣を着ていた。他に人手はないのかとさりげなく打診してみると、その奴婢は国麻呂の持ちものではなく、嶋司が送って来たものであった。五瀬のことは、仕事も含め国麻呂に全て任されているはずで、しかも人手もあるというのに、嶋司がわざわざ自分のところの奴婢をよこしたのは解せなかったが

「何、館様（国麻呂のこと）の家来衆が金を作ったのでは、手柄をそちらに横取りされると思つておるのさ」

屋根の萱を整えていた男がそつと五瀬に耳打ちした。成程、と五瀬は妙に納得した。国衛でちらと見た嶋司の、頬のやけに細長い、捨てられた狐の死骸のような貧相や、典鑄司に向かつて田口東人たくちのあずまひとであると言つた時の脂じみた声の不快さを思い出し、あの男ならさもありませんと心の内に頷いた。

第二章 奴婢の三船（三）

仕方なく、五瀬は嶋司の送ったこの三十がらみの奴婢と二人で、金の精錬に取り組むことになった。鍊金とは暇な作業である。るつばに砂金と鉛とをつめ炉にかけたら、火を燃やし続けながらるつばの様子をじっと見守るのが作業のほぼ全てと言ってよい。しかも時がかかる。一粒の金を鍊るのにも半日がかりだった。

るつばと対峙を続ける長い時間の間、五瀬はしばしば、ふいごを吹きながら目の前に置かれた奴婢の男の面貌を眺めることがあった。それが愉しいわけではなかった。むしろ、自らの瞳に映し込むことで奴婢の穢れがこちらへ移って来るような、そんな不快を感じたが、しかし他に気を紛らすものが工房の周りにはないのだった。飛鳥の工房には村の仲間もいたし、大勢の職人たちが忙しく行き来する様を見ているだけでも時を費やせたのだったが、ここではそうはいかなかった。作業小屋は五瀬と奴婢の男と二人きりで、そして外に目を転じても葉ごもりを幾重にも連ねて森がたたずむばかりだった。人の声ならばある。特に館の方からは、下女が立ち働いているのか、若々しい女の声がすることもあった。このような立派な館に働く女とは如何なる者だろうかなどと、興味を引かれないこともないではなかったが、しかし五瀬の意識は、たとえ束の間女の声の方へ流れても、引いた潮が再び満ちるように結局は眼前の男の顔へと戻って行った。それは暇を持て余してということの他に、男が一度見たら忘れられないような面貌の持ち主ということもあったかもしれない。

男の面相は巖のようにいかつかった。唇の肉がぶ厚く、大きな口を魚のような顎が下から支えていた。目も大きかった。下まぶたが丸く垂れ、はめ込まれた目は磨いた石のような硬質の光を持っていた。夜、揺れる松明の下で見ていると、あたかも人ではないもの

向き合っているようだった。深い山の奥に棲み、木々や人や鳥獣を無言で眺める、名を忘れられた荒ぶる古神の姿すら、五瀬は男の面相の上に思い描いた。

「お主、嶋司に使われる前は何処におった」

ある夜、五瀬は好奇心を抑えられず、炉の炭火で赤く染まる男の顔に向かってそう訊いてみた。

「
」

男は低い声で、何か言った。村の名前らしかったが、島の地理に暗い五瀬には聞き取ることが出来なかった。五瀬の表情を読んで、男は再び口を開いた。

「島の、南の方の村だ。そこの豪族の屋敷に使われておった」

「そして、巖原に売られたのか」

「いや、嶋司が都から来た際に献じられたのだ。売られるのとさほどの違いではないが」

「お主は始めから奴婢であったのか。つまり、親も奴婢か」

「何故、そのようなことを訊く」

男の、磨いた石のような目をまっすぐ向けられて、咄嗟に五瀬は答えに窮した。しかしごまかすのも、また嘘をつくのもためらわれた。

「お主のような面構えの奴婢をおれは知らぬ。故郷にいた奴婢の連中は皆、いつも目を伏せ薄い影のようになって歩いてきた。しかしお主は奴婢のくせに、誰をも恐れぬような不敵な目をしている。だから、生まれついで奴婢ではなく、良民から奴婢に落とされた者ではないかと勘ぐったのだ」

しばらく迷ったすえ、五瀬はありのままを答えた。奴婢の男は不思議そうに首をかしげた。背後に、大きな影がのそりとうごめいた。丈こそ五瀬より低いものの、男の背幅は板のように広がった。少し太り肉の体を火のそばに丸めていると、まるで牛がうずくまっていたようだった。目元と、それから眉間に、のみで打ったように鋭いしわが走り、そこに濃く影がたまっていた。首をかしげて、男は五瀬の方を眺めていたが、

「わしなら、この世にいと気がついた時から奴婢だ。親のことは知らぬが、まず奴婢だろう。変わったことを言う男であるな」

やがてひとり言のようにつぶやき、またるつぼにうつむいてしまった。急に、自分が何かとんでもなく莫迦なことを言ったように思われて、五瀬は慌てて、薄く踊り上がる炎に風を送り込む動作へと戻った。

こちらから話しかけたのであったが、男が黙り込んでしまうと、五瀬はほっと安堵した。知らぬ間に、この奴婢の目に圧せられ、畏怖を感じていたのかもしれない。ふと、この男と今まで一度も口をきいたことがなかったことに、ふいごを動かしてしながら五瀬は初めて気がついた。無論、声を聞いたのも初めてであった。野太いが声の音色に流麗さがあり、聞き苦しい声ではなかった。巨岩の苔を水がつたうような、男の声を五瀬はそう思った。

この夜の事は山奥から流れ下る夜気が見せた夢であつたかのよう
に、五瀬と奴婢の男とは翌日からまた口をきかなかつた。数日であ
つたか、半月であつたか、そうして日にちが過ぎた。ある日、五瀬
は木陰に仰のいて浅い眠りの中を漂うていた。背に沁みる土の熱さ
と、頬や、もろ肌脱ぎの胸に触れる夏草の涼しさが、体にたまつた
疲労を洗い出してくれるようだった。快いうたた寝を貪るうち、五
瀬は誰かに胸をつつかれた気がして、目を開いた。薄眼を開いたが
周りに人影はない。気のせいであつたかと思つた時、つつかれた胸
元に視線を移して五瀬は飛び上がった。

胸の上を這つていたのは一匹の蛇だった。頭上に張り出した枝か
ら落ちて来たのだらう。蛇体はごく小さいが、血のように赤い体に
くつきりとした黒いまだら模様を浮かべた姿が如何にも毒々しかつ
た。大和では見たことのない蛇である。払い落とすか、それとも胸
の上でひと思いに叩きつぶすか、蛇の細い瞳孔を凝視しながらわず
かに手を動かしかけたが、しかしそこからはどうしても勇気がなか
つた。蛇の俊敏なことは五瀬も熟知している。しかも首をもたげた
蛇の鼻先には既に五瀬の咽があるのである。動くに動けなかつた。
と、

「取つてやろう」

聞き覚えのある声がして、視界の隅に黒い影が横切つた。つるば
み衣の大きな体が、五瀬の傍らにしゃがみ込んだ。蛇の背後から手
を伸ばし、犬の咽を撫でるように顎の下に指を入れて柔らかく頭を
つかんだ。驚いてのたうつたと思つた時には、赤い蛇体はあつとい
う間に遠くの草むらへ放り投げられていた。

「お、お主であつたか」

五瀬はそれだけ言うのがやっとだった。張りつめていたものが一度に緩み、かすかにめまいがした。奴婢の男は足元から何かの草をむしっていた。葉を手の中で揉み、五瀬に渡した。

「胸を拭うといい。これで拭うとすぐに取れる」

見ると胸元にねばついた汁がこびりついていて、ちょうど蛇が乗っていた辺りだった。五瀬は慌てて男の手から草をひったくった。

「毒汁か」

「いや、ただの小便だ」

すえたような、生臭い臭いが鼻を突いた。

「まことにただの小便であろうな」

「案ずるな、あの蛇は毒を持ってはおらぬ。小便はひどく臭うが、それだけだ。毒蛇は、ここにはヒラクチ（ ）というのがおつてな、それに気をつければよい」

ヒラクチならば五瀬もよく知っている。大和にもいた蛇であった。たまった落ち葉の下などの湿った所に潜んでいることが多く、きのこなどを採っていてうっかり掘り出してしまい、飛んで逃げた記憶が幾度もあった。

「ほう、都にもヒラクチがおるのか」

つまらないことに男は感心した。如何にも辺土に住まう土民の無知に触れたような気がして、五瀬は思わず口元で笑った。胸中に、

この巖のような、荒ぶる神のような男に対する優越が生まれ、その余裕が五瀬の口を自然に解きほぐした。

「お主、少し教えてくれぬか」

「何だ」

「ここで、ヒラクチの他に気をつけねばならぬものはおるか」

「ふむ、そうだな。まず、ハンミヨウ」

「ハンミヨウ」

「都にはおらぬか」

「おるさ。殻を持った虫だろう。だが毒なぞあったか」

「都のハンミヨウはおとなしいものだな。いや、この島のは毒がある。触ると小便を出す、さっきの蛇と違い手につくものならひどくただれる。噛んだり刺したりするのではないから、気づきづらい」

「獣は」

「こつちは野猫くらいのものだ。餌をあさりに人の小屋に入って来て、飛びかかられたという話がたまにあるが、まあ、たとえ襲われても所詮猫だ。大したことはない」

「猫か。もしも猫に襲われて死んだら笑いものだな」

五瀬が思わずこぼすと、男は声を立てて笑った。そうして相好を崩すと意外な程剽げた表情になった。いかつい面相が割れ、人好きのする顔立ちが現れた。

その後も、五瀬と奴婢の男との間には様々な言葉が交わされた。しかし二人が何を語り合ったかを五瀬はほとんど思い出せない。大して実のあることが語られなかったためでもあるうし、それがただ、情性に流れるままに交わし継いだ言葉だったためでもあつたらう。

しかしこの時周りに広がっていた光景は、五瀬はのちのちまでもありありと眼前に思い浮かべることが出来た。遠山の黛色たいしよくを溶かして涼しい風が通り抜けて行った。草の葉が鳴り、木々の葉叢が揺れた。天から降りた静寂が、草の原を浸していた。静けさの中、花に寄つて来た蛇の羽音が、小さく、孤独に聞こえていた。薄く、大きな夏雲が山向こうから流れて来て、辺りにさつと影を拡げ、そうしてまた去って行った。五瀬は地面に肘をついて寝ころび、そして奴婢の男は腰を下ろし草の葉を噛んでいた。これと言った好意を持っているわけでもない者同士の周囲に、このように忘れがたく美しい景色が展開されたとは、思えば奇異なことであつた。

それでも五瀬は、別れ際の会話だけは覚えている。間借りしている郡衙の奴婢小屋へ戻って行くこととする背に、五瀬は名を訊いた。

「お主、まだ、名を訊いておらんかった」

「三船だ」
みつふね

ぶ厚い、一枚板のような背が答えた。

* * * * *

肩を揺すられて五瀬は目を開いた。瑠璃玉とよく似た空の色が目に染み入って来た。

「三船か」

視界の端に黒衣の裾がちらりと揺れ、草を押し分けて座り込んだ。

「おれは、眠っていたか」

声が濁った。身じろぎして五瀬は草の中からけだるそうに体を起こした。よく見ると雲が弱冠動いていた。わずかの間、確かに眠っていたらしい。しかし過ぎた時以上に夢見が深く、頭の中では、瑠璃の蒼も対馬の山林の影も三船の低く流れる声音も、皆一緒くたに混じり合い一つの色に溶け合っていた。昼寝とは呑気な身分だ、と隣で三船がからかった。

「昨日からずっとふいごを吹いていたのだ。仕方あるまい」

「それは、わしも同じだよ」

「今、何刻あたりだろう。まだ夕暮れには間があるうな」

「昼を少し過ぎたところだ」

「では飯の前にもう一度、炉に火を入れられるな」

両手でごしごしと顔を拭って眠気を払い、五瀬はひらりと身軽に立ち上がった。頬を風が撫でた。草の間に顔を沈めれば青臭いいきれは未だに濃く思われるが、山の背から吹く風はもはや物憂い。五

瀬が対馬に来て四月もの日々が過ぎていた。季節は更に移ろう気配を見せている。しかし都人の待つ金は、五瀬のるつぼの中に未だ姿を現してはいなかった。

(第二章・了)

第二章 奴婢の三船(三)(後書き)

マムシ

第三章 任那の面影（一）

地面をくぼみ状に掘った炉の中に、五瀬はじつと顔をうつむけて
いる。炭火が薄く静かに躍り、五瀬と、向かい側に座って共にふい
ごを吹く三船の顔の上を、炎の波が行き過ぎた。うつむいた顎先か
ら汗がしたたった。炭火にあぶられて、石皿に一つまみ程の金属が
溶けている。融解した赤い塊を五瀬は凝視していたが、もうよかろ
うとつぶやいて、火ばしで石皿をつかみ炉から下ろした。紅蓮の色
が次第に冷め、黒い金属の塊が皿の上に残った。

五瀬は、それを小さなつぼに入れ、再び炉中に置いた。二方か
らふいごで風を送るうち、やがて塊はるつぼの中で溶け始めた。

この塊は貴鉛きえんと呼ばれる、金と鉛の合金である。金を精錬するた
めに鉛を用いることは既に触れた。精錬の工程は、まず砂金と鉛を
混ぜ、溶かしてこの貴鉛を作ることから始まる。

貴鉛が出来たら、るつぼに入れて再び溶かし、湯（ ）を作る。
この貴鉛の湯には、金、鉛、そして砂金に含まれる砒素や珪素とい
った不純物の、三つが溶けている。貴鉛が湯になったところで、次
は湯面に風を送り、鉛に酸化を促して行く。この時、送り込む風は、
ごく弱くなくてはならない。精錬に用いるるつぼは凝灰岩を球に近
い形状にくり抜いたものだが、手のひらに収まってしまいう程小さく
かつ薄い。少しでも強い風を当てると湯が冷め、酸化が進みづらく
なるためだった。

酸化した鉛、酸化鉛は、二つの、精錬には不可欠の性質を持つて
いる。すなわち比重が他の金属よりも軽いこと、そしてもう一つは
表面張力が非常に弱く、土や砂などに容易に染み込むことが、それ

である。

比重が軽くなるために、鉛は酸化するそばから他の不純物ぐるみ浮いて行き、湯の表面に集まることになる。そして、浮いた酸化鉛はそのまま、るつぼの肌に染み込んで行く。るつぼの材質が凝灰岩であることは述べたが、これは表面に無数の穴のある多孔質の岩石であり、液体を容易に含む性質を持っているのである。

不純物が鉛と共に酸化し、るつぼに染み込む一方、金は空氣に触れても酸化することはない。また溶けた金は酸化鉛とは逆に表面張力が非常に強いため、るつぼに染み込むこともない。こうして加熱を続け、鉛が不純物と共にるつぼに染み込み、また一部は蒸散してなくなってしまうと、最後に、るつぼの底には金だけが残ることになるのである。これが錬金の仕組みであった。

ちなみにこれは、中世に石見銀山などで盛んに用いられた灰吹法と呼ばれる精錬法と全く等しい技法である。ただ後世の灰吹法においては、るつぼの底に骨灰を厚く塗り固め、そこに鉛を吸収させるよう改良がなされている。いくら吸水性を持つとはいえ、溶けた金属を石に吸い取らせるのは、効率が悪かったであろう。るつぼに吸収させるのと温度を上げて蒸発させるのと、半々というのが実状であったかもしれない。

るつぼの底で湯の周囲が黒ずみ始めた。熱せられた酸化鉛が石肌を灼きながら染み込んでいたのである。五瀬は目で、三船にもう少し炎を強めるよう合図した。金属は、合金を形成すると低温度で融解する性質がある。金の場合鉛と結びつくと三百度程度の低温で溶けてしまう。これを今度は、本来の金の融解温度である千度あたりまで加熱し、鉛を飛ばし切らなくてはならない。こうした一連の作業を二度、三度と繰り返し返して純度を高めて行き、ようやく一粒の

純金が得られる。実に根気の要る作業であった。錬金とは、繁忙とは逆の意味で時間との戦いであり、金鍛冶に求められるのは何より岩の如き我慢強さだった。

陽が山向こうに落ち始めた頃、ようやく炉の火が消えた。五瀬は待ちきれぬように火ばしでるつぼをつかみ上げた。あちこち動かしながら日に透かすようにしてじっと底を見ていたが

「また、だめだな」

湿ったため息と共にるつぼを地面に放り出した。下草がじゅっと小さな音を立てて焼けた。火ばしを受け取り三船もるつぼを拾って覗き込んだ。底には鉛の染み込んだ跡が黒く残るばかりで、金らしきものは毛ほども見当たらなかった。

対馬金の精錬は難航していた。湯から金が上がらないのである。これまで、まがりなりにも金と呼べるものが得られたのはただの一度、それも砂粒のようなものだけで、あとは、金と鉛の分量、比、炎の強さなどの条件を等しくしたり、または逆に様々に変えたりして試したが、金は一向に得られなかった。るつぼの底に金粉の痕跡らしきものでもうっすらと残れば良い方で、大抵は今のようにも何もかも蒸散してしまうのだった。

「五瀬、今日はもう終いにしよう」

三船が炉から炭の燃えがらをかき出し始めた。

「分からぬなあ」

山の背から夕闇が指を伸ばしていた。空を浸して行く薄闇を眺め

ながら、五瀬は絞るようにつぶやいた。疲れた目を閉じると、るつぼの底で赤く溶けていた鉛の姿が、ぼんやりとした影になってまぶたの裏に残っていた。火ばしが炉の底をかく音が耳にわびしく響いた。

一度きりとはいえとりあえず金は得られているのである。精錬には問題はない。そうだとすればあとは砂金に混じり物が非常に多いということが疑われて来るのだが、しかしこれもまた、五瀬には考えづらかった。純度の低い砂金は赤みを帯びていたり、または黒みがかつていたりするが、対馬の砂金は見たところ美しい黄金色を持っている。それに、そもそも銀鉍や銅鉍と違い、砂金は金の含有率が高いものなのである。蒸散してしまうような砂金など、五瀬は今まで見たことがなかった。

いたずらに積み上がるばかりの失敗の理由も分からず、かと言って一度きりの成功の理由もまた分からず、ただ時ばかりが費やされた。泥の中でもがくような焦燥の日々を送るうち、追い討ちをかけるように、巖原から国衙の役人が鶏知を訪れた。無論、精錬の進み具合を視察するためである。仕方なく、五瀬は鉛が黒く焼けついただけのるつぼを役人の前に示した。

「何も進んでおらぬとは如何なることか」

役人は顔色を変えて五瀬につめ寄った。

「湯から金が上がらぬのです」

五瀬はうなだれながらありのままを報告した。

「手順に誤りはありません。砂金の方にもおかしなところはないよ

うに思われるのですが」

「ですが、何だ。ならば何が悪くて金が上がっておらぬ」

「 分かりませぬ」

「 たわけが」

はらわたをぶちまけるような剣幕で、役人はわめいた。

「分かりませぬで済むか。金がまだ一つも上がっておらぬ。何故かも分からぬ。左様な報告を都へ持って行けと申すのか。おい、雑戸」

青ざめて這いつくばる五瀬の衣を役人はわしづかみにし、手荒に引きずり上げた。

「三日だけ待つ。三日のうちにも金を上げよ」

「無茶を申されますな」

「やかましい」

分厚い手が襟をつかみ、布地が首に食い込まんばかりに揺さぶった。

使いの役人の苛立ちは、そのまま畿原の国衙にいる嶋司、田口東人の苛立ちであった。東人としては一日も早く大掛かりな金精錬の工房を建て、人数を動員して、朝廷に納める金の鋭意生産にかかりたいのである。しかし肝心の五瀬がなかなか成果を上げないために、計画の何もかもに見通しが立たず、東人もまた焦燥の中にあつたの

だった。

「お主がここへ来て幾月経ったか存じておるのか。知らなんだら教えてやるう。六月じゃ。半年じゃぞ。半年もただ飯を食らうて寝ておったくせに、どの口が無茶などと申すか」

耳元で言いたい放題に怒鳴り散らされて、さすがの五瀬も腹に怒りがこみ上げた。一枚しかない衣が裂けるのも構わず、彼は力任せに役人の手を振りほどいた。

「貴方様は、金を錬るということを何もご存知ない」

「何だと」

五瀬は地面からるつぼを拾い上げ、役人の目の前にぐいと突き出した。

「錬金には時がかかるのです。このるつぼに金と鉛をつめ、鉛が全て飛ぶまで焼かねばなりません。この一度が成功か失敗か、それが分かるまでも、幾刻もの時が要るのです。向こうに打ち捨ててあるたくさんのるつぼを御覧下され。この鍛戸は何とか金を上げようと努めて参りました。怠ったがために未だ上げられぬなどとそしりを受ける覚えはございませぬ」

刃のような沈黙が、二人の男の間に落ちた。目をむいて五瀬を見ている役人の顔に、憎悪の色が滲み上がった。雑戸めが、唇が動いた。いつとき、右手があがくように腰の刀をまさぐり、彼は柄を握りしめてすさまじい形相を五瀬に向けた。が、雑戸とはいえ朝廷の命で派遣された者を、小役人の一存で斬り捨てるわけには行かぬ。全身を震わせ彼は柄から手を引きもぎった。次の瞬間、沓先が五瀬

の股ぐらを思いきり蹴り上げていた。

「十日のちに再び参る」

下草に顔をつ突っ込んでうめく五瀬に、役人は唾を吐きかけわめいた。

「それまでに何事か報告出来るようにしておけ」

草を荒々しく踏み散らす音が遠ざかり、入れ替わりに三船が駆け寄って来た。

「おい、大事はないか」

「玉が腹にめり込んでそのまま口から出たかと思ったわ」

下腹部を押さえたまま五瀬は切れ切れの息の下で首を振った。三船は吹き出した。

「そつやって剽^{ウラシ}げる余裕があるなら安心じゃ」

「莫迦、剽^{ウラシ}げておるのではない」

三船の肩を借りて五瀬はよろめきながら小屋に戻った。三船は五瀬を座らせると患部を冷やすための水を汲み、林に入って行った。しばらくして何か見慣れぬ草を手に戻って来た。

「五瀬、無茶はせんでくれよ」

打ち身に効くというその草を石で叩きながら三船が言った。

「憤りは分かるが、あれでは命が幾つあっても足りぬ。わしは陰で見えておって生きた心地がせんかった」

「ああ。いや、おれもいつもああではないんだが……」

五瀬は、丸裸の下半身に、絞った布だけを股間に乗せた滑稽な有り様を晒しながら、力なく答えた。彼は滅多に感情を露わにすることのない男だったが、まれに憤るとそれは必ず己の身の上にてきめに災いをなした。磐来といさかったあの時もそうであったと、五瀬は苦々しく思い出した。

磐来との時も、先程も、五瀬は自分の怒りは正当なものであったと信じていた。が、そんなものは所詮虫けらの正義に過ぎぬ。虫けらとて、理不尽な目に遭わされれば人を噛むが、しかしそこに正義を見る者はない。そして噛んだ虫の方はきつと、足の下に踏み潰されて殺されることになる。怒りにすら貴賤があるのかと、思い巡らす程に五瀬は情けなかった。

第三章 任那の面影(一)(後書き)

溶けた金属のこと

第三章 任那の面影（二）

蹴り飛ばされた部分の刺し込むような痛みが引くにつれ、役人への憤りは次第に薄らいだが、入れ替わりに今度は胸苦しい不安が容赦なくこみ上げ、気を重くさせた。

三船は手を伸ばして股間の布を取り上げ、潰した草の汁を染み込ませて返してよこした。

「何、五瀬。役人は当分来ぬさ。口では十日なんぞとっておつたがな」

「何故分かる」

「年が明けたら、国衙では都に帳簿を送らねばならん」

「四度遣よどのつかいとかいうやつか」

「そう、それだ。国衙はもうじき、その仕度に追われる頃だ。とてもこつちまでは手は回らん。わしは国衙で見て来たからな」

三船が言った帳簿とは、租税の収支を書きまとめた正税帳のことである。前年度からの繰り越し、当年の収入と支出、来年度への繰り越しが記録されており、それを国司は年に一度、二月の末日までに朝廷に提出しなければならない。対馬から大和までは二月余も日数がかかるため、今年のうちには帳簿をまとめなければ、とても間に合わないのだった。

国司から朝廷への遣いはこの他に、戸籍及び調（ 1 ）・庸（

2)の数量を報告する大計帳使、調・庸・雑物(3)を運納する貢調使、政務報告書を納める朝集使がある。正税帳使と合わせて年に計四度、遣わされるため、これらをまとめて四度遣と言った。

「そうだといいが」

五瀬は頷いたが、表情は相変わらず冴えなかった。彼の不安はもはや役人が来て当り散らすことではなく、もしもこのまま金を練り上げることが出来なかつたら、自分は一体どうなるのかということころにあった。

五瀬とても、自らが置かれた立場に全く無知だったわけではない。飛鳥を出立する時に感じた異様なざわめきと熱気、典鑄司の役人の殺気立ったと言つても過言ではない様子、金に寄せられる、朝廷の関心と期待を肌身でもって感じていなかったわけではない。ただそれは全て、雲の上の出来事に過ぎなかつた。

しかし、国衙より遣わされた役人の尋常ではない剣幕を目にした時、もしも朝廷の期待に応えられなかつたならば、それがそのまま大きな災いとなって己が身に帰って来るであろうことに、五瀬は初めて思いあたった。役人から鞭で脅されることには飛鳥の工房で慣れていたが、それとこれとは重みが違う。鋼のにおいを伴った生々しい恐怖の形で、五瀬はようやく、対馬の金、そして自分がたずさわっている仕事の重要性を悟つたと言つてよい。刃の触れる感触が身の内によぎって、五瀬は眉を曇らせ思わず首筋をさすった。

「金が得られぬとなつたら、やはり死罪であろうかな」

「五瀬よ」

うなだれた肩を三船の拳が突いた。

「わしは鍛冶のことは分からぬ。だがお主が何も誤りがないと思うのなら、金はいずれきつと得られる。金は心を持たぬ。我らを欺きはせぬはずだ」

明瞭な口調で言った。力強い言葉がずしりと胸に響いて、五瀬は思わず涙ぐみそうになった。三船は腰を上げた。炉を片付けて来ようとおつばやくと、五瀬が何か言葉を返す間もなく、そのまま小屋を出て行った。

* * * * *

その日の夕刻、二人が飯の仕度をしていると、厨家の方から酒が届いた。昼間、役人との間に悶着があつたと聞き知つた国麻呂が、気遣つて届けさせたのだった。

「これはすごい。米の酒ではないか」

瓶を覗き込んで五瀬は目を見張つた。

米の酒など庶民が口に出来るものではなかつた。例えば三田の村で祭りの際に作った酒は、ニワトコの実や雑穀を醸したものであつた。味はひどく甘つたるく、大量に飲めるものではない。強いだけ取り柄といえれば取り柄だが、しばしば悪酔いを引き起こすので、安心して酔うことも出来ぬという代物であつた。

沫雪のように白々と濁つた酒を、二人は恐る恐る手のひらに汲んだ。一口すすると、芳醇な香りがたちまち唇に沁み、咽を、それから体をうるおした。

「美味しいものだな」

三船は首を振ってしきりと感嘆した。が、五瀬の方は、国麻呂の心遣いが苦しく感じられ、美酒を愉しむことが出来なかった。

「金の方が進んでおらぬのに褒美だけ貰うては、気が咎めるか」

「いや、そういうわけではないが」

五瀬は言いよんだ。心をふさいでいる思いは複雑だったが、それを正確に他人に伝える言葉を五瀬は持たなかった。

国麻呂は五瀬の身边を何かと気にかけてくれていた。時々館の家人を工房によこしては、不自由していることはないかと尋ねさせ、時には自ら出向いて来て、作業の進み具合や都の様子など、賤しみもせずに五瀬と語ることもあった。

国麻呂ばかりではない。鶏知の人は皆々、五瀬に親切だった。五瀬を見かけると「鍛戸殿かぬちへ」と気さくに声をかけてくれた。また近くの村からは若い娘が菜や魚などを持って来てくれた。雑戸である五瀬を蔑むどころかまるで客人のように接してくれるおおらかさに五瀬は当惑していたが、やがて理由を知った。対馬には雑戸民がいないのである。この世に雑戸の存在しない土地があるとは、五瀬にとつて非常な驚きだった。

「対馬には、我のような雑戸はおらぬのですか」

世間話の合間に、五瀬は国麻呂に尋ねてみた。

「雑戸がおるのは都近くの国だけだ」

国麻呂は苦もなくそう答えた。辺境の地とはいえ、代々郡司を務めて来た対馬島の長は、さすがに国の仕組みに明るかった。

「雑戸が置かれておるのは、帝のおわす大和国から、確か東は遠江国、西は摂津国まで十ばかりに過ぎぬ。雑戸は、それこそお主が都でして来たように物を作って朝廷に納めねばならぬのだから、かような遠地に置いても益はない」

「……」

人々の中に雑戸という観念がないならば、奴婢ではない以上五瀬は確かに良民として遇されるはずであった。しかし五瀬は、この地で侮蔑や嘲弄の目をまぬかれているのは、ただ人々が、自分の卑しさを知らぬゆえなのだ、ひそかなおのきを覚えた。取り巻く人々の親切は無論嬉しかったが、しかしその一方で、自分が、あたかも無知につけ込んで善良な人々を欺いているかのような後ろめたさに、五瀬はさいなまれた。

故郷の地で、雑戸の、奴婢のと嘲られた時は、おれは賤民ではない、お主らと同じ良民だと眉を張った五瀬であったはずなのに、いざ屈辱から解かれ温かな腕に迎えられると、心はかえっておびえ畏縮した。陽が明るく照れば影がより濃くなるように、鶏知の人々の好意に触れれば触れる程、五瀬は自らの卑賤が骨身に沁みる思いがした。

「おい、三船」

返事がなかった。見れば三船は早々に酔いつぶれ火の傍らに眠り

込んでいた。五瀬は寝わらを抱えて来て、大きな体の上に乗せてやった。

唇がひそやかな吐息を吐いた。この、自分より一回りも年上の奴婢に、五瀬は、今は友と言つても良い程の親しみを感じていた。三船の、何事にも動揺を見せぬ岩のような心根が五瀬は好きであった。三船の示す十年來の知己のような遠慮のなさが好きであった。焦りばかりがつのる工房であったが、そのような日々の中でも、ふいごを吹きながら二人とりとめもなく語らうのは愉快なひと時であった。しかし五瀬は、そうした心の内を口に出せぬのは勿論、未だに三船を友垣と呼ぶこともためらわれていた。

五瀬にとつては、鶏知の村人よりも三船の方が、余程気が置けない相手であつたのだが、それは三船が奴婢であることとどうしても無関係ではなかつた。良民である村人と交わる時、五瀬は雑戸という、自らの卑しい身分階級を否応なく意識しなければならぬ。しかし見下すべき身分の賤民と交わるならば、それを直視せずに済むのである。三船と共にいて感じる心安さの陰にはそうした性根の暗さがあるのだつた。その、自らの心からくり、五瀬は敏感に気づいていたのである。

良民でも、また賤民でもない、雑戸という身分の忌まわしさと孤独を、五瀬は思った。

『雑戸は所詮、雑戸と交わるより他ないということか』

五瀬は軽くなつた酒瓶を手元に引き寄せたが、頭の芯が固く冴えて行くばかりで、酔いは容易に五瀬の元を訪れてはくれなかつた。

* * * * *

浅茅の入り江に船が入ったとのことで、鶏知はにわかになぎやかになった。五瀬も、興味を引かれて見に出かけた。船着き場は、郡衙から川沿いに半里（二km）ばかり北へ上った所である。われがちに駆けて行く子供たちの後を着いて行くと、やがて大きな船が見えた。船着き場となつている入り江は海が山を削りながら細く、かつ長く陸に入り込んでいるため、一見して海とは思われぬ程、波が穏やかである。船は鏡のような水の上に帆をたたんでひっそりと浮かんでいた。舳先に立てられた何かの旗だけが、時折風を受けて水藻のようにゆっくりと揺れた。

船はこれから葭原へ向かうのだった。浅茅の湾内を東へ進み、船越という地峡の最細部にあたる所で、土地の者を雇って船を陸に引き上げて陸路を運び、反対側の海へ入れる。後は葭原へ向けて海路を南下すればよい。大きな船を陸に上げて運ぶとは大変な手間だが、しかし島の端を大きく迂回して行くよりは、よほど楽なのである。

その船越に向かう前にこの鶏知の入り江にわざわざ止まったのは、海を通るにあたり郡司へ挨拶するためだった。船長は既に郡衙へ向かったとみえ、船着き場では船乗りたちが思い思いに体を休めていた。水や食べ物、酒などを持って近隣の村人が集まり、船乗り相手にもう商売が始まっていた。

眺めるうちに、ふと五瀬は、船乗りたちの話している言葉から、彼らが唐人であることに気がついた。

「ああ、あれは新羅の船だ」

隣に立って見物していた男が教えてくれた。

「新羅」

五瀬は少し驚いた。三十数年前、天智帝の下で日本は百済と共に新羅・唐の連合軍と白村江で戦い敗れた。百済は滅び、その後朝鮮半島は新羅によって統一され、今に至る。新羅との国交は天武朝の時に回復し、人や物が行き来してはいるが、実際は両国の間には未だに見えない緊張状態が消えていない。少なくとも朝廷の方針はそうようになっていて。今も烽が置かれ防人が東から送られているのがその証拠である。烽とはのろし台のことで、対馬を起点に壱岐、九州の筑紫から瀬戸内を通って大和まで山上に転々と設置されている。朝鮮半島に近いこの対馬にもしも新羅の水軍が攻め寄せるようなことがあった時は、この烽で次々とのろしを上げ次いでいち早く変事を都へ知らせることになっている。大掛かりな伝達機関だった。

つまり対馬は、对新羅の、国防の最前線と位置づけられているのである。その対馬の入り江に新羅船が堂々と入り、村人と交わっているのは奇異な感じであったが

「さあ、都のことは分からぬが」

男は首をかしげただけだった。

「新羅の船とは昔から商いをして来たからな。烽が出来てみたり、この島も物々しくなったが、わしらは拘わりのないことであるし。向こうも変わらず商いに来ておるわけだから、暮らしを無理に変えることはなかるう。まあ、銀山が出来てから、新羅から盗人に来る者が増えたのは少々困りものだが」

「そんなものか」

五瀬は感心しながら、あらためて船着き場の様子を眺めやった。おちこちで値の交渉が行われている。互いに言葉は分からないらしいが、指を二本出し、三本出し、そんな素朴なやり取りだけで話が進んでゆくのは見ていて微笑ましかった。交渉がまとまったのか、顎の四角張った船乗りが、布を差し出して酒瓶を受け取っているのが見える。また向こうでは干魚を籠に入れて商う娘をつかまえて、身振り手振りせつせと話しかけている者もいる。買い物かと思うと実は口説いていたらしく、その男は結局、頬を赤らめた娘に袖で散々にぶたれていた。

第三章 任那の面影（二）（後書き）

- 1 その土地の産物
- 2 労役の代りの物納
- 3 鋤・塩など米以外の形で賦課された租税

第三章 任那の面影（三）

五瀬が工房に戻ったのはそれからしばらくのちだった。

「三船、お主、千俵^{せんびょう}蒔^{うづ}山^{みやま}への道^{みち}を知らぬか」

戻るなり、五瀬は、ちょうど奴婢小屋から工房へやって来た三船をつかまえ、勢い込んで訊いた。

「何だ、いきなり。何処へ行っておった」

「ああ、浅茅の浦だ。新羅の船が入ったのを見に行っていたのだが」

船着き場にたむろするうち、五瀬は偶然に、千俵蒔山という山から、新羅の姿が見えるという話を聞いたのだった。千俵蒔山とは対馬のほぼ最北端に位置する。対馬は北へ行く程、朝鮮半島に近づくので、この千俵蒔山の辺りが直線距離が最も近い場所になる。距離が近い上に、山自体も海に向かって大きく盛り上がりつつ見張り台に適しているということで、山頂には烽と、烽を守る防人が置かれ、変事知らせる第一砲を担わされていた。防人たちはここから新羅と日本の間に横たわる渺茫^{びやうぼう}とした海を見つめ、海の向こうにうつすらと浮かぶ山々を見つめ、夜の目も寝ずに見張りをしているのだった。

「おれの祖は、百年ばかり前に大和へ渡って来た任那人^{みやまな}なのだ。その任那は、新羅の南の端にあつた国だと聞いたことがあるから、千俵蒔山から見える山とは、それは任那の山に違いない。見てみたい。道案内出来ぬか」

五瀬はまるで牛のように落ち着きなく歩き回りながら、興奮気味に喋りたてた。三船はあきれ顔で眺めていたが、

「悪いが、よした方がいい」

首を振って諫止した。

「千俵蒔山はすさまじく遠い。わしも下県生まれで道をよく知らぬ。それよりも、聞いたであろうがあそこは烽が置かれてある場所だ。見張りの兵もおるし、たとえ行つたとしてもおいそれと登つて海を眺めるといふわけには行かぬよ。しかし五瀬、気を悪くするかもしれぬが、お主は任那とやらを知らぬのだろうか？ 一体、とうになくなつた故郷なぞ眺めてどうする」

「おれにも、よく分からぬ」

五瀬は口ごもつた。確かに三船の言うように、見たことも行つたこともない任那の山を海に向こうからちらと眺めたとして、どうなると思えない。それに、五瀬が今まで、故国へとりわけ強い憧憬を抱いていたかといえ、実はそうでもないのである。

しかし、この対馬から新羅　つまり任那　が見えるのだと聞いた時、よく分からない何かの感情が、いきなり泡のように、体に沸き返つたのだった。その泡が今も五瀬を急かしている。背を押し、焼き焦がし、焦燥のような、哀切のような、居ても立ってもいられない情感へと、五瀬をひたすらに駆り立てるのだった。

「おれにも分からぬ。分からぬが、このままでは胸が乾いて苦しいのだ。ひと目任那の姿を見ることが出来たなら、胸も静まるのではないかと思う。そのために、行きたいのだ。三船よ、何とかならぬ

だろうか」

三船は、やっぱりよく分からぬというような顔つきであった。が、ともかくも知恵を絞ってくれ、千俵時山までわざわざ行かずとも、島の西側の浜まで出れば、新羅の山影を拝めるのではないかと憶測を立てた。しかし西の浜へ出るといつても、やはり徒かちで行くというわけには行かぬ。途中には山並みが複雑に連なって立ちはだかつており、時が幾らかかるか分からない。

「近くの浦里へ行ってみよう。日頃から浅茅を行き来している漁民ならば、新羅が見える場所を知っておるはずだ。舟を雇い、出して貰えばよい」

数日後、空が澄んだ日を選び、五瀬は三船と共に先日の船着き場へと出かけた。海辺にたむろしていた漁民を捕え、新羅の山が見える所を知らぬかと訊くと

「さて、入り江の出口まで行けば、見えぬこともないが」

そこへ舟を出して欲しいと五瀬は頼んだ。迷惑顔の漁民に布を払ってなだめ、口説いて、ようやく空いている小舟を出して貰えることになった。潮を煮つめたような赤黒い肌の老人が操る舟に、二人は乗り込んだ。

「お主も乗れて安堵した」

小舟が船着き場を出ると、五瀬はほっと息をつき、小声で言った。頼みの綱の三船が、奴婢は舟に任せぬと乗船を拒まれるのではないかと、五瀬はそれが一番の気がかりだったのである。しかし当の三船は

「左様なことは言わぬさ」

涼しい顔だった。

「わしは、言ってみればお主のたずさえた荷であるからな。人だけ乗せて、荷は置いて行けという話はあるまい。荷も乗せるならその分布を払えと言われるかもしれぬとは、思ったが」

口の片側で小さく笑った。兩岸から急峻な山並みの迫る入り江を、舟は軽々と滑った。空は澄んでいるが、船腹を舐める水は岸に近いせいか、くすんだ緑色に静まっている。海に向かつて突き出た低い崖の上に男の姿が見え、見ているうちに身をひるがえして波間に飛び込んで行った。貝を漁る漁民と思われた。次々と流れて行く景色を遠く見つめながら、三船は片頬の笑みはそのままに、

「人にあらぬものの、役得だ」

ようやく聞き取れるくらいの声で、ぽつりとつぶやいた。

細い入り江を抜け出、舟は速度を増した。潮の流れがあるのか、それとも老船頭の櫂さばきが巧みなのか、水鳥のように鮮やかに潮を押し分けて走って行く。冷たい潮風が、衣に染み透って肌を刺した。舟はたちまち浅茅浦を渡り切って入り江の突端の小さな岬を回り込み、波の洗う崖の間にこじんまりと開けた砂の浜へと上がった。砂地のすぐ向こうに小高い山が隆起していた。老人は手を上げてそちらを示した。

「あそこに登ればよからう。新羅は、ここからでは随分遠いが、まあ若いお主なら見えるだろうて。わしはここで待っておる。遅くと

も陽がこの辺りまで傾いたら戻って来てくれ。この年では夜の海は渡れぬからな」

二人は小山を登った。膂力を買われて山仕事をしたことのある三船は先に立ち、手斧を振るって枝や蔓を払い道を開いた。登攀を始めて一刻余り、二人は小山の頂に到達した。木暗い茂みをかき分けると、眼下に海原がひと息に広がった。硬く青く澄んだ空の下に、海はひととき濃い青を敷き横たわっている。二つの境が石を割ったように鮮やかであった。ぴんと張りつめた水平線の上へ、二人は懸命に目を走らせた。

「おい、あれではないか」

三船が気ぜわしく衣を引き、指を上げた。

おお。

五瀬は息を呑んだ。

吸い込まれそうな海の藍と、薄氷のような空の青、その間に、海の色とも空の色とも異なるもう一つの青色が幻のように浮かんでいる。隆起しては沈み、なだらかな起伏を繰り返して延々と伸びるそれは、山の稜線に違いなかった。

「任那だ」

絞り出した声は、ひどくかすれた。

大和で生まれ育ち、忍海の周りと飛鳥の谷しか知らぬ五瀬には、任那とはあの世よりも遠い国であった。幼い頃から年寄りに建国の

神話を聞かされ、祭りでは任那より伝来したという祝詞を唱えても、確かな手ざわりをもって故国というものを感じられたことはなかった。五瀬だけではない、一族の誰しもがそうであったろう。帰る場所を持たない孤独は、三田一族の心の底に澱のように積もり続けねばならなかった。

しかし今、その任那の国が潮のうねる果てに見えている。年老いた語り部の声の中にだけ、淡く儂く仄見える陽炎に過ぎなかった故国は、力強い色彩と体臭とを伴い、手に触れるような生々しさで眼前に横たわっていた。

「三船、任那だ。おれたちの骨と血が生まれた国だ」

血の滲み上がるような目で稜線の青い陰影を見つめ、五瀬は夢中で声を上げた。

任那という国は消え去った。だが、あの青くかすむ山の向こうには、祖先が暮らした山河があり、仰いだ空がある。心の寄る辺とすべき地は確かに存在するのだ。血が、熱く震えた

眼下の海に船の姿が見えた。帆をいっばいに張り風をはらんで外海へとゆっくり滑り出て行く。舳先に旗がひるがえった。船着き場で目にした新羅船に似ていた。

我が兄弟はらから

心の中で、五瀬は船影に呼びかけた。任那の血を引く若者の、望郷の念を託されたとは知らぬままに、船は対馬に背を向け海の向こうの国へただ静かに帰って行く。

「よかったな。来た甲斐があつた」

三船の手が、ゆっくりと、力強いしぐさで五瀬の肩を揺すつた。五瀬は何も言わず、肩に置かれた手をしっかりと握りしめた。魂の帰る地がある。そして傍らにそれを喜んでくれる友垣がある。ひと時、五瀬の孤独は洗い流された。そして一族の中に刻みつけられた百年の流浪の孤独もまた、青い影の向こうにひと時の間すがれたように感じられた。

(第三章・了)

第四章 持統の思い（一）

都の藤原京では、文武四年（七〇〇）の正月が明けた。

前の年、宮中には不幸が相次いだ。七月には天武の第六皇子、弓削皇子げのみしが二十七才の若さで薨去した。次いで九月には天武の妃であった新田部皇女にいたへのひめみこが、そして十二月にはやはり天武の妃であった大江皇女おえのひめみこが、共に病でみまかった。大江皇女は、弓削皇子の生母である。息子を失った心痛が、もともと病がちであった皇女の命を縮めたのである。

皇家を立て続けに襲った不幸は、宮中に目に見えない不吉の雲を広げていた。一昨年は金の発見という吉報に沸き返ったばかりであっただけに、凶兆の感は余計に、藤原京の人々には強かった。三者の殯（一）は未だに続いており、宮中には何かと繁忙であったが、そのような忙しさは心をかき立てる糧にはなり得ない。いきおい、華やかさとは程遠い初春の明けであった。

弓削皇子の夭折もさることながら、持統の心にとさらに深い影を落としたのは、新田部皇女と大江皇女の死であった。新田部と大江は、天武の妃であったと共に、天智の娘でもあった。持統とはつまり異母姉妹なのである。父と夫を同じくして生きた二皇女が、わずか三月余りのうちに続けて薨じたことは、持統の心に、まるで両の腕を切り取られたような痛みと心細さとを、与えずにはおかなかつた。

「人にとって親の血は重いものだ。そして女性じよごにとって夫はこの世の誰よりも密に近い者だ。その二つを共々に同じうした、わたくしと皇女であるもの。大江と新田部の死に、そのままわたくし自身

の死の影を垣間見てしまうのは無理からぬことではあるまいか。この頃の鬱々とした心持は、ただ悲しみのせいばかりではなく、そのためでもあるう……』

ようやく律令の編纂事業が動き出したというのに、重く沈んで一向に奮わぬ我が身が、持統には腹立たしい。自らに冷徹な分析眼を向けることで、ともすれば苛立ちがちな心を落ち着けようと努めるのだった。

鬱とした心の翳りゆえか、年明けてからの持統は、椅子にもたれてものを思うことがしばしばとなった。いや、それはもの思いとは少し様子が違っていた。くさぐさの記憶はあたかも刺客のように常に背後に寄り添っていた。そして、ふと、心が虚となった一瞬を突いて、それは心に忍び入り体を満たしてしまうのだった。疲れのあまり自制が効かぬまま沈み込んで行く眠りに、その感覚は似ていた。

今も、持統は窓近くに寄せた椅子に肘を突き、ぼんやりと思いを巡らせている。大納言、大伴御行みゆきを部屋に呼んでおり、その来訪を待っているのだったが、みなもの浮き草のように記憶の中を漂う彼女の脳裏からは、そのことはすっかり忘れ去られていた。

日没が間近い。開け放った窓の外は木々の葉にも建物の柱にも、塗りつけたように夕映えが赤かった。

『血濡れの色だ』

持統の唇がつぶやいた。彼女の精神は、朱あけを見ればほとんど本能的に、血を思わずにはいられない。事実、持統の華やかな人生を折々に彩って来たのは、匂やかな花の色でも、あでやかな衣の色でもなく、鮮烈な流血の色であるのに違いなかった。

持統が生まれたのは皇極五年（六四五）、父である天智帝　この当時はまだ中大兄皇子といった　が、朝廷の重臣であり、政の事実上の執行者であった蘇我鞍作臣入鹿を大極殿にて暗殺した、あの乙巳いつしの変の起きた年であった。

入鹿暗殺の急報に、入鹿の父、蝦夷は己の命運を悟り屋敷に火を放って自害した。始祖、武内宿禰すくね以来朝廷の重臣として、また皇家の外戚として力を振るって来た蘇我本宗家は一日で斃れ、大極殿に流れた血と、甘樫丘を焼いた炎とで、飛鳥の一带は朱に染まった。

しかし、これで流血が終わったわけではなかった。乙巳の変のあと、叔父孝徳帝を戴き皇太子となった天智は、政変からわずか四月の後、謀反の企てありとして、出家し吉野に隠遁していた異母兄、古人大兄皇子ふるあひのおおえを討った。古人大兄は、入鹿が後ろ楯となって次の帝に推していた人であった。入鹿・蝦夷の縁故の者や、朝廷に反発する勢力が、古人大兄を奉じて叛乱を起こすことを危ぶんだ天智が、先手を打ったのである。

この時持統は生まれたばかりの乳飲み児であったから、一連の出来事は何ひとつ、覚えてはいない。しかし、多くの血が流されたこの皇極五年という年に生を受けたことは、宿命的に持統の人生を朱の色に染め上げずにはおかなかつたように思われる。

持統が五才の年には、孝徳朝の重臣である蘇我石川麻呂が、天智からやはり謀反の嫌疑を受けて妻や息子共々自害した。天智の舅であり、持統にも祖父であった人である。持統の目に残っているのは、事件そのものではなく、父の死に、身が裂かれんばかりに泣き叫ぶ

母、遠智媛おちのいらつめの姿だった。そしてその日以来、幼い少女にとって母は遠い人となった。父の悲運を嘆き悲しむあまり遠智媛は次第に心を病んで行ったのである。持統の心もまた、抜け殻のようになり果てた母を慕うことは出来なかった。四年後、遠智媛は正気を取り戻さぬままに、亡くなった。

しかし持統の心に最も強く灼きついている血の影は、孝徳帝の嫡男である、有間皇子あじまのみしの事件だった。その当時、孝徳帝は既にこの世になく、天智は、母、斉明を女帝に戴きその皇太子として、政を執っていた。そうした頃であった。

あの冬、斉明女帝をねぎらうため、朝廷の者がうちそろって紀の国の温湯へ湯治に出かけたのだった。南紀の荒々しい自然はさほど好もしくも思われなかったが、重臣から妃、奥仕えの女官まで顔をそろえて遊山に出かけるといふその目新しさ、物珍しさは、持統の心を明るくときめかせたものだった。紀温湯で過ごした日々は間違いないく、持統の少女時代で最も幸せな時間だった。

祖母の斉明や姉と共に、持統は行宮近くの浜へ遊びに行った。他にも幾人か、妃や女官などが一緒であったような気がする。姉の大田皇女は波しぶきのすぐ間近まで寄り、打ち寄せる波を待つては逃げて遊んでいたが、持統の方は岩に打ちつける太く重たい波音が怖くて、遠くからただ見ていた。

「何にでも度胸を見せる貴女が、今日はどうしたの」

大田はおかしそうに幾度も持統を誘ったが、持統は結局波打ち際に寄らず、砂の乾いた辺りだけを行き来して、袍の裾に貝殻を集めることに熱心した。

「きれいな」

貝拾いの手を止め浜を一望して、持統は心の底から陶醉した。視界いっぱい広がる澄んだ冬空の下、女たちは思い思いに着飾り、女帝を囲んで無邪気に遊び興じている。美しい平穩に身体を洗われて、しかしふとその時、持統は瞳を曇らせた。

幼い頃から彼女の心は一つの癖を持っていた。心身が幸福を感じると、咄嗟に次に訪れる不幸を予見し、固く身構えてしまうのだった。この時も、明るい昼下がりの砂浜で、持統の胸はゆえ知らずざわついた。そしてその胸騒ぎは的中した。翌日、飛鳥より馳せ参じた使者は、謀反を企てたかどにより、有間皇子とその側近らを捕えたことを告げたのであった。

宮中が空になったところを衝いて飛鳥の皇居を焼き討ちにし、かつ、水軍で淡路の海を封鎖し女帝はじめ朝廷の主だった者を紀の国に足止めして、都を制圧しようというのが、有間の弄した策であったという。その話を聞き、持統は夫、天武のもとへ有間の助命に走った。

持統は、有間と特別に親しかったのではない。つやのない色白の頬と物憂げな瞳を持った青年の面影は、少女の持統の目に印象的に映えはしたが、しかし持統は幼い頃より、年頃になれば叔父の大海人皇子 天武のことに嫁ぐのだと言い聞かされて来た身であった。そして一方の有間は、身は酒色にふけるのに忙しく、心は自らの憂いを覗き込むのに忙しくといった有り様で、まだ年端も行かぬつぼみに花の香りを見る余裕など持たなかった。そうしたわけで、二人の間には恋愛の如きものに発展し得る、如何なる感情も芽生えようがなかった。

持統が助命に走ったのはだから、有間に対する親愛ゆえではなかった。あえて言えば持統の理性が、彼女を走らせた。

「有間様は無実です」

天武の膝にすがって持統は訴えた。

「謀反の話をお聞きになったでしょう？ あのようなずさんな策でまことに都を奪えるとは思えません。有間様はそのような愚かな方ではありません。これは何者かが、有間様を陥れようと描いた筋書きです。なにとぞ、罪を免じて下さいませよう、父上に進言なさせて頂きませ」

持統の訴えを天武は困ったように聞いていたが、やがていたわるようなしぐさで持統をそばに引き寄せ、菟野（ 2 ）と、一言、声優しく呼んだ。

「朝廷を乱さぬため、世を治めるためには、やむを得ぬのだ。兄上を責めてはならぬ」

あつと息を吞んで、持統はこの事件のからくりを何もかも理解した。有間は天智と不仲であった。また以前から、朝廷の政に公然と批判を口にしてもいた。先帝の嫡男である有間には、皇位の継承権がある。影響力の決して小さくない有間が現朝廷に反発を抱いているとは、確かに危うい事態であった。不満分子が有間を帝として奉じ、挙兵することもあり得るのである。しかしだからといって、無実の人に罪を負わせ、しかも大儀のためにはやむを得ぬとは、人を統べる者の行うべきことではないと、持統は憤りを覚えた。心の中でどうしても、父を蔑まずにはいられなかった。

しかし。のちに持統は、蔑んだはずの父と同じ道をたどることになる。

薨去した天武の殯の場で、姉の大田が天武との間に遺した息子、大津皇子を捕え、謀反の疑いありとして処刑したのである。

息子、草壁と同様に天智帝の直孫という血統を持ち、かつ朝廷内での人望も厚かった大津は、天武朝においては常に、草壁に次ぐ立場にあった。つまり皇太子となった草壁を脅かし得る存在だったのである。

とは言うものの、持統は始めから大津の存在を危ぶんでいたわけではなかった。天武が自らの後継と明言したのは草壁である。しかも草壁の後ろには皇后たる持統がいた。それにひきかえ、大津は幼いうちに母を亡くしてしまっており、後ろ楯という点においても、二人は比較にならぬはずであった。しかし、天武の薨去が予想以上の動揺となって朝廷に広がるのを見た時、持統の中に大津を生かしておくことへの危惧が生まれた。

天武帝を父に、天智帝を祖父に持ち、年令はわずかに一才違いという具合に、よく似かよった星の下に生まれ落ちた草壁と大津だが、その気質は、二人はまるで正反対であった。

草壁は、文武に受け継がれたものが示すように、細やかで心静かな人となりであった。一方、奔放で闊達な、英雄の風とも呼べる気性を持っていたのが大津であった。

皇子たちの中では大津が自分に最も似ていると、生前天武は語ったことがある。また存命の頃には天智もまた、大津の文武ぶんぶの才を褒め、可愛がったものだった。それは、夫も、父も、大津に自らの姿

を重ね、愛したのに違いなかったが、しかし持統は逆に、大津の中に躍動する英傑の気宇にこそ、危険を感じた。

彼女に言わせれば、英雄的人物は諸刃の剣なのだった。確かに英傑は世を導く一条の光である。父も夫も、まさにそのような人生を送った。しかし、よりしばしば、そうした人物はむしろ世を乱し、破壊する元凶にもなり得る。英雄とは乱れた世に救いとして現れるのではない。英雄の気宇を抱く者が現れた時、その壮大な英気に世が否応なく巻き込まれ、混乱にみまわれるのだと、天智、天武という、まさに不世出の英傑を身近に見、共に生きた持統は思うのだった。

この国はもはや動乱の時代を乗り切り、平穏の中で円熟して行かねばならぬのである。天武の死でただでさえ動揺している朝廷に、大津のような者がいてはならぬ。動乱の目に見えぬ雲が集まり出す前に、禍根は絶たねばならぬと持統が心を決するまでに、さほどの時は要らなかった。そして方策については、かつて父が目の前で示してくれた。大津が死を賜ったのは、天武薨去からわずかにひと月のちだった。

第四章 持統の思い(一)(後書き)

- 1 貴人の死体を、葬る前に棺に納めてしばらく安置して行う儀式
- 2 持統の実名

第四章 持統の思い（二）

* * * * *

扉が開いて、持統の想念は唐突に断ち切られた。やがて女官に案内されて、大伴御行が部屋に姿を見せた。大伴氏の氏上であり、また言うまでもなく、対馬での金の採掘と精錬事業の責任者に任じられている重臣は、持統の前に歩を運び、深々と一礼した。

大伴氏は二百年余もの昔、雄略帝の御世から朝廷の中枢に勢力を張って来た名家である。その長老にふさわしく、老いが目立って来たとはいえ、御行の背には、辺りを払うような威風が未だにみなぎっていた。

「対馬の件にて」

かしらを上げて御行は言った。先日、宮では初春の拝賀の儀が行われたが、その際御行のもとへ対馬の嶋司より使者があつたとの話を、持統は耳にしていた。今日御行を呼んだのは勿論、対馬からの報告を聞くためである。しかし持統の期待に反し、御行によれば使者の持つて来たのは、金の精錬については鋭意進めているというだけで、要は単なる機嫌伺と言つてもいいような他愛のないものに過ぎなかった。

「それだけですか。もう少し具体的な話があるかと思つたが」

「残念ながら。しかし、飛鳥より遣わした鍛戸が向こうに到着したのが昨年の五月あたりと聞いております。そうして今回の使者が島を発つて来たのが十一月、つごう半年の報告となると、対馬守と

てもまださほどには申すべきこともなかるうかと」

「確かにそうではあるうが」

持統はため息まじりに首を振った。腰かけていた椅子の肘かけの上を、指先が気ぜわしく動いた。

「大納言、わたくしは」

ややあつて、持統は少し改まった声調で、再び口を開いた。

「現在進めさせている律令、この発布と、金献上の儀とを、共々に行いたいと考えている」

「律令発布の儀と献上の儀とを」

御行は、さすがに少々驚いた。進めさせているといっても、編纂の作業はまだ編者の選定にかかったばかりである。金の方もまた、精練がどの程度進んでおり今後どの位の日数がかかるものか、全く見当がついていない段階で、それはあまりに先走り過ぎた計画ではあるまいか。御行は諫めかけたが、持統の目は冷静で、そして真剣であった。

「律令と金とは一体のものである」

御行の当惑は既に置き去りにして、持統は言葉を継いだ。

「大叔父、天万豊日尊あまのよひのゆき（孝徳帝のこと）から五十年に渡り、皇家はこの国を唐のような成熟した体制にすべく、心血を注いで参った。今回の律令作成は、その集大成と言っても良い。言わばこれをもつ

て国造りの事業は完成を見るのです。これより以後は、富や武の力ではなく、理知と、真の律令が国の全てを動かして行くのです。

けれどそのためには、今編纂する律令はただの紙の束であっては困る。国のあまねく民の心に律令の威が染み透り、民は帝にひれ伏すようにそれを重んじ、敬う、そのようではなければならぬ」

「そのために金が必要なのでございますな」

律令と金を共々に、という持統の思惑を御行はようやく把握した。

割拠する有力豪族が相食む時代から、皇家の武力統治へ、そして律令による政へと、この国は苦闘しつつ長い道のりをたどって来た。その歩みを決して後戻りさせてはならない。そのためには、文武の下に発布されることになる新たな律令は、先の近江令や飛鳥浄御原令の、単なる改訂という位置づけであってはならなかった。律令国家の完成を象徴するにふさわしい、今までとは全く異なった特別な権威を伴って民の前に現れなければならなかった。

銀が貢献された時のことを御行ははつきりと覚えていた。太上天皇も無論、覚えているはずである。壬申の乱の革命で先帝天智の残した近江朝廷を倒し、天武は王として飛鳥に凱旋した。しかし流血で権力を得た側の常として、天武朝の人々は、自らが葬り去った者の亡霊と、血が引き寄せる不吉の影とにおびえねばならなかった。そんな天武朝にとって、銀の発見という吉事は、まさに神の差し伸べた救いの御手であった。不吉の予兆は消え、いわば神仏の後ろ楯によって、天武は平穩の内に世を治めることが出来た。

そうして今、対馬で金が発見されたとの噂は、大和のみならず、遠く東の国々をも駆け巡っていると聞く。それは飢きんや干ばつの災いが続く中であって、人々が金の上に神の恩寵を見ているため

あろう。金が都に運ばれ献上される。そしてそのままゆい輝きの下に発布された律令は、帝でも朝廷でもなく、神のもたらしたものであるとして、人々の心身に染み透るのではあるまいか。

持統が律令編纂という大事業に乗り出したのは、文武政権下で政が軌道に乗ったのを見届けたためである。が、真に持統の背を押したのは、何よりも金の発見であったのかもしれない。その報を聞いた時、この老女帝の胸の内にはたちどころにして一つの青写真が出来上がっていたのかもしれない。

「律令は二年をかけず完成させるようにと、忍壁おさかへと不比等ふひとには申し渡してある。これは何としても間に合わせるつもりです。律令発布の儀は来年の夏か秋には執り行いたい。それに合わせ献上の儀も、来年の内には行いたいのです」

眉を持ち上げ隆とした声でそう言うと、持統はふつと息をついた。椅子からゆつたりと立ち上がり御行に背を向け、窓の方へと歩み寄った。未だ空に残る夕映えの色が、半分開いた窓から流れ込んでいた。残光の中に踏み込んだ持統の横顔が、血濡れのように赤々と照った。

「大納言、そなたが来る前、わたくしは大津のことを思い出していた」

低く、持統は言った。あの時持統の片腕として自らも陰謀に手を染めた御行は、は、と、無機的な返答を返した。

「世を治めるためには、やむを得ぬことであつた」

有間皇子の助命を嘆願する持統をなだめて天武が言ったのと、全

く同じ言葉を、彼女は口にした。

「あれがいては、朝廷の内に必ずや、乱を引き寄せたであろう。致し方なかったのだ」

「太上天皇、しかしその代わり、あの時をもつて、この国は動乱の時代を乗り越えたものと、大納言は信じております」

持統の口を遮るように、御行は力強く明言した。

大津を手にかけた持統の心の内を、推しはかる術はない。しかし何といつても、大津は父母を同じくした姉が産んだ、天武の皇子なのである。血の結びつきを語るならば、現在彼女が溺愛している文武よりも、縁は濃いのだった。朝廷から禍根が除かれたとて、晴れやかな心持ちで今日まで過ごして来たはずはなかった。

ただ持統は、大津の謀殺も、その後妃の山辺皇女が大津の後を追って自害して果てた痛ましい出来事も、全てはこの国を長きに渡る安寧に導くための、避けられぬ犠牲であったのだと、自身に言い聞かせて来た。その思いを、御行はあえて持統に代わり語った。

「もはや帝も、その御子らも、刃を手に争う必要はございませんまい。かつてのように皇家が自ら血を流す時は過ぎました。皇子が流された血が、世を万世の平安に導くための最後の贄にえでございます。律令完成の暁には必ずや、刃ではなく律をもって動く国となります。太上天皇のお望みどおりに」

「分かっている」

持統は静かに頷いた。

「国が成熟するためには血の犠牲が要りようなのだ。それは古今の歴史が教えている。酒は麴こうで熟し、国は刃と血とで熟する。致し方なかった。けれど、大津の血も、誰の血も、わたくしは無駄にはせぬ」

窓の外に落陽を見送りながら、持統は言った。まなざしは、淡い夢に遊ぶような穏やかな光をたたえている。しかしそうした静やかさは、この女帝が弓づるを引き絞るような固い意志を抱いた時の横顔であることを、御行は知っていた。

「対馬のこと、承知致しました」

そう言った御行の声には、深いいたわりがこもっていた。

「近々私自ら使者を遣わします。太上天皇が律令制定に如何に強い思いを傾けておられるか、大納言はよく存じております。なにとぞ御案じ召さりまするな。金は、何事があるうとも来年の内に献上させましょう」

御行は持統の賢明さを熟知していた。政治的判断の鋭さ、物事の洞察の深さには崇敬の念すら抱いていた。がしかし、彼女の聡明さ、そして意志の強さに触れる程、御行は何故かそこに、刃の前に裸身を晒そうとするような危うさを、感じずにはいられなかった。実際には持統の方がわずかに年上であるにも拘らず、御行が持統を見る目には、兄が妹に向けるような、父親が娘に向けるような、そんな慰撫の情がいつも交じっている。男の性さがであるかもしれなかった。

* * * * *

足元の石だたみから立ち昇る温みが、冬の終わりを伝えて来る。

忍壁皇子おさかへは宮の廊下を、撰令所へと足早に向かっていた。頬と精悍な顎を黒々と覆う美髯が目を引く人である。目元はのみを打ったように彫りが深く、黒い目を実際以上にまなざし鋭く見せていた。体つきは、丈こそないものがつしりと引き締まり、歩むに合わせ、朽葉色の袍が、たくましい肩に柔らかくまくまといつく様に、粗野ではない男臭さが漂った。

廊下を渡りきり、彼は「撰令所」と大きく墨書きされた板のかかる部屋の前へ出た。と、手をかけると同時に扉が内側から勢い良く引かれ、若い官人が急ぎ足で出て来た。書類の束や書物を両手一杯に抱え、急ぎ足であるのはそれらを落とさぬようにするためでもあるらしい。扉を閉めようとして初めて、彼は入り口の脇に立っている人に気がついた。

「あ、こ、これは御無礼仕りました」

穏やかとは言いがたい忍壁の気性を知っている彼は、青くなって身をかがめた。忍壁はうるさそうに手を振ってとどめ、構わぬから行くよふにと目で示した。官人が行き過ぎるのと入れ替わりに、忍壁は部屋に入った。

広い部屋の中には今しがたすれ違ったような下級官人が幾人も、忙しげに動き回っていた。運んで来た書物を整理している者がある。内容を確認しているのか顔を寄せ合って話し込んでいる者がある。かと思えば不要になったものをひとまとめにして運び出そうとしている者がある。

この撰令所は、律令の条文作成や編纂といった一連の作業を行う

役所である。現在は編纂者の人選が行われている最中であつた。

忍壁は持統より、この律令事業の総裁に任じられていた。彼は天武帝の第四皇子である。四年前、第一皇子であつた高市皇子が没し、そのためまだ壮年にさしかかつたばかりの年令にもかかわらず、天武の皇子たちの中では現在彼は最も年長である。自然と、皇家を代表し、また中心となつて家を取りまとめる立場を担わされていた。皇家におけるこうした立ち位置に加え、かつて天武の命で諸古事の編纂にたずさわつたという経歴も彼にはある。これらを鑑みての任命であつた。

第四章 持統の思い(三)

雑然とした中に、暖かくなり始めた陽を慕うように窓ぎわの文机に座り、傍らの者と何事か熱心に言葉を交わしている五十がらみの官人の姿を見つけ、忍壁はそちらへ歩を運んだ。

「これは」

人の気配を感じて、その人は顔を上げた。相手が忍壁と気づき、立ち上がって深々と一礼した。粟田真人^{あわたのまひと}である。大宰府の長官を長く務めた経歴を持ち、現在は民官(1)の長官を務めている。のちに、彼は遣唐使として唐に渡るのだが、唐の正史「旧唐書」はその人物を、

「好く経史(古典・歴史)を読み、属文(作詩・作文)を解す。容止(風貌・挙措)温雅なり」

と記している。

総裁に任じられた忍壁が自らの補佐役としてまず真つ先に加わってもらったのがこの粟田真人であった。持統太上天皇からは、編纂事業は二年をかけずに成すようにと厳命を受けている。一から作成するのではなく、今まで施行されてきた飛鳥浄御原令を修正し手を加える形で進められるとはいえ、今後数十年、もしかしたらそれ以上の期間の施行に耐え得る律令を突貫作業で編纂せよというのであるから、大変な難事業になろう。無論、動かさねばならぬ官人の人数も膨大なものになる。この粟田真人という人の、知識、政の経験の豊富さ、人あたりの穏やかさといった徳は、事業を動かしていく上で必ずや大きな助けになると、忍壁は見込んでいた。

忍壁は作業の進み具合を訊いた。真人は問われるまま手元の木簡に覚書きされた幾つかの名を示した。

「伊余部馬養殿いよへのうまかいには加わっていたただく所存でございます」

真人は言った。

「律令の条文を作るには文筆に長けた者がどうしても必要です。彼の者なら適しておりますよ」

伊余部馬養は文人として著名な人で、その能を買われて皇太子時代には文武帝の教師も務めた。また地方官として丹後に赴任した際には、土地に伝わる物語を筆録したことなども忍壁は聞いていた。ちなみにこの時馬養が筆録したのは水江浦嶋子の物語といい、後世浦島太郎として広く読まれることになる民話の原型である。

「成程」

この人選には、忍壁はすぐにうべなつた。それから彼は机上の木簡を手に取り、記された名に一つずつ、目を通した。

調老人じよきのおきな。十年程前、馬養と共に歴史の美談集を編纂したことがある。土部甥はじのおい。唐に十数年も留学していた有識者である。その他にも、留学生や学問僧として唐の文化、学問に通じた者の名が並んでいる。良い人選であった。

「編者は何名くらいになる」

「左様でございますな」

真人は、新しい律令の全体像を、既に漠然とではあるが描いていた。巻数は、飛鳥浄御原令とほぼ同等、二十巻前後になると思われる。令は二十五から三十本、律は十本程になる。それらを幾つかに分け担当者を定めて編纂をさせる。だいたい二十名が適当ではないかと真人は答えた。

「皇子も経験があまりでございましょうが、こうした仕事は人が多くても少なくとも滞ります。少なければ手が足りず、多ければ混乱致します」

「確かにそうだ。二十名、うむ、わしもそのあたりで良いと思う」

「ああ、しかしこれはあくまでも私の考えでございます。中納言殿は如何様に考えておられるかは存じませぬ」

真人は部屋の隅へ目を転じた。文机の周りに書物、資料の類をうず高く積み上げ、傍らに助手も置かずひとり一心に、藤原不比等ふひとが書類をめぐっていた。

彼は律令編纂事業の副総裁であった。持統が忍壁共々、直々に任じたのである。しかし、副総裁というものの、忍壁は皇親の代表者として、不比等は諸臣の代表者として、それぞれ抜擢されたと考えると、忍壁と不比等、二人の立場や権限はむしろ同等と言った良かった。

真人に誘われて忍壁も不比等を見た。作業の具合を尋ねるべきは、本来は真人ではなくまず副総裁の不比等である。が、忍壁はちらりとそちらを見たり、そばへ寄ろうとしなかった。仕事に没頭する不比等に気をつかったのでは無難ない。この男の顔つきや口吻、

人を見る時の目つきなどの、如何にも才知に長けた官人といった風を、忍壁は本能的に嫌っていたのである。

* * * * *

不比等は現在四十二。この一大事業の頭を務めるには少々若輩過ぎる感があり、事実、左大臣の多治比真人といった朝廷の長老をおさえての抜擢である。持統の、不比等に対する信頼の厚さが窺える。

不比等は、かの中臣（のち藤原）鎌足の次男であつた。鎌足といえば、天智帝の股肱であり生涯の盟友であつた人だが、自身の娘を天武の妃に入れたりなどして、その晩年には天智のみならず天武からも大きな信頼を勝ち得ていた。父、鎌足に、天武と持統が寄せた信頼が、そのまま息子の不比等への厚遇へとつながつたことは想像に難くない。

ただ、不比等は天武朝においては目立つた働きはしていない。年若かつたこともあるし、また、同族である中臣氏は近江朝で要人を務めていたのだが、壬申の乱のあおりで朝廷から一掃されてしまい、その影響もあつた。しかし代が変わり持統が即位するや、不比等は政の表舞台に華々しく登場して来る。飛鳥浄御原令の施行に伴い判事に任命されたのである。年はこの時、三十一。位階は既に直広肆（二）である。早い出世であつた。

不比等という人物を語るには、父鎌足のことと共に、妻、犬養三いぬかい千代みちよのことにも触れておかねばならない。三千代は文武の乳母であり、文武が長じてのちは養育係も務めた。その拘わりで、持統からは厚い信頼を寄せられていた。

この三千代に、不比等が近づいたそのきっかけは、自らの娘、宮

子を、文武の即位にあたって妃に入れようと画策したことに始まる。既に持統の信を得ていた不比等だったが、宮子入内をより確実なものにするため、後宮の勢力を後ろ楯にし搦め手からの工作ももくろんだ。そうして目を止めたのが、奥で隠然たる発言力を持つ、三千代だったのである。三千代もまた、権力欲求の強い婦人であった。鎌足の血を引く才知溢れた野心家と、後宮を動かす権力指向の女性と。二人の結びつきは必然であったと言つてよい。

二人の尽力で宮子の入内は成功した。そしてこれは間違いなく、持統を通じて三千代が糸を引いたのであるが、文武は即位後も皇族から妻を娶らなかつた。従つて文武には皇后はおらず、第一夫人の宮子が、事実上の皇后である。あとは宮子が皇子を産みさえすれば、不比等は帝の外祖父として強大な権力を手に出来ることになるのだつた。ちなみに宮子入内を機に不比等と三千代は互いの配偶者を離縁して夫婦となつている。そして皇家は、宮子が産んだ聖武帝のもとに、三千代が産んだ光明子が皇后として入内するという流れとなつて行く。

そんな不比等である。無論今回の編纂事業の副総裁という人事も、三千代の影響が全く無関係ではなかつた。

筆にたつぷりと墨を含ませ、不比等は木簡に力強く、候補者と思つ者の名を書きつけた。忍壁が部屋に入つて来たのも、真人と人選に関して語っているのも気づいていたが、彼はわざと知らぬふりを決め込んでいた。忍壁が不比等を好いていないように、不比等もまた同様に、忍壁に好印象を抱いているとは言い難かつた。確かに、皇子は愚人ではないかもしれぬ。が、物事の考え方が、不比等に言わせれば忍壁は万事、夢想的、熱情的であつた。政にも、またこの律令編纂事業の総裁として人を動かすにも向いていないと、自らをもつて現実主義者と自認する不比等は、そのように評価していた。

総裁である忍壁や、栗田真人が如何様な名を編者に考えているかなど、彼には関心が薄い。自らの人選にまさるものはないという心づもりが、筆跡に表れていた。

朝廷の人々が自分について何を囁いているか、不比等はよく知っている。編纂事業の人事に三千代の口添えがあったことは既に周知であるし、そもそもこの夫婦の成り立ち自体が清らかなものではないことも、皆々暗黙のうちに了解済みである。中納言は自らの栄達のために人の妻を盗ったと、陰で遠慮もなく言い合っていることも彼の耳には入っていた。

しかし当の不比等は、そうした陰口は毫も意に介してはいなかった。

不比等は己の才をよく自覚していた。かつまた、己の才を愛してもいた。自らの持つ才覚にふさわしい仕事を与えられることは、若い頃から抱いて来た切望であった。持統が任じた判事の職に不満があったわけではないが、しかしもっと大きな仕事がしたい。一国を動かすような大事こそが、自らの才覚にはふさわしいのだという強烈な自負があった。

しかしそのためには出世しなければならぬ。位階が低い下級役人が、如何に才があろうともどうやってそれを発揮し得ようか。誰でも好きに陰言すればよいのだ。自分が栄達を求めたのはあくまでも才をふるう場を得んがためである。それにひきかえ、あの口さがない官人どもは所詮、関心事といえば冠の色のみではないか。

新たな木簡を取り上げ、不比等はもう一つ、名を書きつけた。本格的な律令を編纂し、律令国家の礎を完成させるとは、まさに不比

等が望んだとおりの大事業だった。この事業を動かすにふさわしいのはただ自分だけであると、そこまで不平等は信じている。妻の口添えて抜擢されたとして、それは些事に過ぎぬ。

三千代のことだ。誰も何も分かっておらぬ。

筆先をちよつと止め、不平等は口元に薄く冷笑を浮かべた。

確かに、三千代に近づいたのは後宮の後ろ楯のためであったことは間違いない。がしかし、それが理由の全てであったと言えは誤りになる。不平等に言わせれば、三千代は、藤原不平等という男を誰よりも理解する者であった。三千代が、前夫の美努王みぬおうを凡夫に過ぎぬとして切り捨て不平等と一緒にしたのも、その才と、将来における栄達を見抜いていたために他ならない。

それは一方では、もしも不平等に栄達の道が閉ざされた場合には、今度は不平等が、塵か芥のように三千代に捨てられるということでもあるが、だがそうした緊張感のある夫婦関係があってもよいと、不平等は思っている。

要は、不平等にとって三千代とは、利用価値の非常に高い女性であるのと同時に、非常に魅力的な女性でもあったのである。欲得ずくだけで男と女が夫婦をやっておれるものかと、彼は世人の俗な噂を腹の内で大いに嘲笑した。

(第四章・了)

第四章 持統の思い(三)(後書き)

- 1 民政一般を担当する省
- 2 従五位下

第五章 椎根にて（一）

下県西岸の椎根しこねという地へ、五瀬は赴くことになった。椎根には国麻呂の従兄弟にあたる、対馬県ひづえ広兄の屋敷があり、五瀬は鍍金の仕事のために招かれたのだった。

先だつてのこと、五瀬は国麻呂に呼ばれ、鍍金をほどこすには手間がかかるものかと尋ねられた。

「いや、面倒なことは何もございませぬ」

五瀬は明快に返答した。必要なものは金と水銀だけである。それに幸い、五瀬は自分の道具はひとまとめにして対馬へたずさえて来ているため、道具の類も皆そろっている。

「実はお主に鍍金を頼みたいという者がおつてな。わしの従兄弟なのだ」

その広兄の屋敷では今年の夏、亡父の法要が執り行われるのだという。広兄はかねてより、都から遣わされた金鍛冶が国麻呂のもとに逗留していることを耳にしており、供養のため家伝の金かなほとけに金をほどこしてもらえまいかと、国麻呂に打診して来たのだった。

「手間がかからぬというのであれば、工房の方を少々休んで出かけてもらいたいのだが」

本来ならばその仏像を鶏知に運べばよいのであるが、台座にしっかりと据えつけてあるためにどうにも動かせない。そこで鍍金師の方でこちらに出向いて欲しいというのが、広兄の申し出であった。

「あの、その金仏というのは大きいものでございますか」

台座に固定してあるというところが少々気にかかり、五瀬は訊いてみた。見上げるような仏像を一人で鍍金するのはさすがに無理である。しかし

「いやいや、懸念には及ばぬ」

国麻呂は察して手を振った。費用との折り合いもあり、鍍金は頭部だけで良いと言った。その頭部はおおよそ大人の手のひら程とことで、そうであれば行き帰りの行程を含めても半月程度で済むであろう。材料が届きしだい出向くことにして、五瀬は快諾した。

幾日も経たぬうちに、金と水銀が屋敷に届けられた。新羅の交易船から買うものとはばかり思っていた五瀬は、あまりの速さに驚いたのであったが、

「大宰府から取り寄せたのだ」

国麻呂はさらりと言った。

「唐や新羅から来た品々は、まずこの対馬を経、次に筑紫の大宰府を経て都へ送られるが、品の皆が皆、都へ着くわけではないということだ。こちらも入り江をただで使わせるわけには行かぬゆえな」

と、国麻呂は意味ありげに忍び笑った。

以前鷄知の入り江に新羅船が入り、船長が郡衙を訪れたことがあったが、あれはそういうことであつたかと五瀬は合点した。そして大宰府は、遠の朝廷とのおのみかたと称される、朝廷の最も重要な出先機関である。

その長官への貢物はかなりのものになるであろう。それこそ銭さえ出せば金銀玉くぎんぎくの類はすぐに出せるくらいに、大宰府の倉は富んでいるのかもしれない。

ともかくも、仕度を整え五瀬は三船を伴って椎根へと出立した。

椎根への経路は、新羅の山を見に出かけた時とほぼ同じである。船で浅茅浦を渡り外海へ出る。そこから海岸線に沿って三里（10km）も南下して行くと、佐須川さすという、下県の中央にそびえる矢立山を源流とする川の河口に出る。この河口付近にわずかに開けた平坦地に、広兄の村があるのだった。

ついでに言うところの佐須川を中流まで上ると檜根という地があり、対馬銀山はここに営まれている。また金の採掘が進められているのも、この付近であった。

船が、船着き場を離れて潮を漕ぎ出した。船人は四人。五瀬と三船、加えて国麻呂の家人と兵士が一人ずつ同行した。家人は分かるとして問題は兵士の方である。万が一の護衛であろうが、しかし時折、油断ない視線が五瀬の背に鋭く刺さるのである。いぶかるうち、これは、自分や三船が逃亡した場合を考えての同行でもあるらしいと、五瀬は思い当たった。武器に身を固めた者に見張りを命じた国麻呂の心中に想像を向けることはあえてしなかったものの、当然のことながら愉快な心持ちではなかった。背に当たる視線は殊更に無視して、五瀬は首を伸ばして彼方を見やった。

「もう、見えぬな」

隣の三船に言った。任那のことである。

「うむ、海の水がぬるんでしまつとかすんで見えぬらしいからなあ」

二月も半ばにさしかかっていた。老漁夫の小舟で渡った時には石のように張りつめていた冷たい海も、一日ごとに暖かさを増してゆく陽光に温められ、水平線の上にはうつすらと陽炎の如き透明のもやが、ゆらゆらと遠景を遮っていた。

村に入り、五瀬は家人の男に案内されて広兄の屋敷を訪れた。

「こちらの勝手な申し出にもかわわず、よう参ってくれた」

と出迎えた対馬県広兄は、国麻呂とはまるで正反対の人物だった。年は国麻呂より二才上ということで、年格好は似ている。そしてよく見れば声や話し方、顔立ちも似ているのだが、国麻呂の顔が肉つき豊かで全体に丸みが目につくの比べ、広兄は鼻も顎も岩を割ったようで鋭さばかりが印象に残った。

「やはり、農夫と漁夫の違いではないか」

あとになって、三船は国麻呂と広兄の違いをそう分析した。広々と水田が開ける鶏知に対し、椎根では主に漁労で暮らしを立てている。もみを蒔き、土や稲を辛抱強くあやしながらその成長を待つのと、船で潮を分け波に挑んで獲物を得るのとでは、風貌にも差異が現れるだろうと三船は言った。

「ところで、後ろに這いつくばっておるつるばみは何だ」

その広兄は、五瀬の背後に平伏している三船の姿に目を止め、不快そうに眉を上げた。

「この者は、我の弟子の如きものでございませう」

と、五瀬は説明した。

「弟子。奴婢がか」

「対馬に参つてからはずっとこの者を片腕として参りましたゆえ、我を除けば、島で金に最も通じておるのはこの者にございます。共に仕事することを許していただければ」

「ふん」

広兄は鼻筋にしわを浮かせた。しばらくそうしていたが、仏像に触れさせぬならばという条件で、ようやく許した。

金仏は、敷地の一隅に設けられた御堂みだうに安置されていた。頭に宝冠をいただいた、釈迦如来の坐像である。像は大きな蓮華の上に座り、その蓮華が更に大きな台座に据えられている。台座には一面、繊細な唐草紋が彫り込まれ、細工の見事さに五瀬が思わず感嘆の息を洩らすと、

「高句麗の金銅仏（ ）であるらしい」

広兄が言った。

「以前屋敷に逗留した旅僧が申しておった。古いものらしいが、しかし何故に海を渡って我が屋敷に伝えられることになったかは知らぬ」

広兄は手を伸べうやうやくやく如來の頬に触れてみせた。顔は面長で、髪はいわゆる螺髪らぼうではなく線彫りである。法衣をまとった体が

瘦せこけるばかりに細身であるのも、飛鳥で見て来た仏と確かに異なっていた。

夜、遠方からの客人を珍しがって、村の男たちが小さな酒宴を開いてくれた。鶏知の人々のおおらかさにも戸惑ったが、いきなり現れた異邦人とすぐに酒肴を囲む村人のあけつびろげな人となりには、五瀬は内心驚くばかりだった。故郷忍海の村々は、よそ者に対してもっと閉鎖的であった。五瀬は柄にもなくあれこれと思考を巡らせ、国が置かれた条件の違いが、人となりに出るのかも知れぬと思ったりした。

対馬は周囲を外海に囲まれ、実際に大陸からの交易船の中継地にもなっている。以前船着き場で目にしたように、船でやって来た唐人と村人が交わり、物品を商う光景は、ここでは何の珍しさもないものである。ひるがえって、山々に囲まれた盆地に住まう大和の民は、近隣の二、三の村の者と接するのが関の山であった。本当は大和は様々な国の品や人が最も集まっている土地なのだが、そうしたものに触れることが出来るのは一部の天上人だけであり、民のほとんどは、海の間こつどころか他国のことすら思い描いたことはいのではないか。

「時に鍛戸殿かぬちへ、お主は館様のところの仏様を直すために、わざわざ都から来たのかね」

村人の一人が訊いた。

「いや、この鍍金の仕事は別口だ。おれはもともと、この島で出た金を錬るよう命ぜられて、それで来たんだよ」

「ああ、左様か。そういえば都から人が来ておると聞いたな。」

村を流れておる川を見たか。金はあの上流で掘っておるよ」

「聞いた。樫根という所に、銀山と金掘り場があるのだろう」

五瀬の発言がきつかけとなつて、男たちの間にしばらく鉱山の話が続いた。主な労働力は防人たちだが、働き手は近くの村々からも徴集される。仕事は金銀の採掘で、金は川に入って底の砂をさらい、銀は岩板に走る鉱脈をのみで削つて集める。また銀の場合は精錬作業も加わる。どの仕事も、一日やっていると自分の体なのか分からない程にくたくたに疲れきってしまう。あれはつらい作業であつたと、樫根で働いたことのある者は皆口々にこぼした。

男たちの話に頷いていると、足音が近づいて酒宴の輪に新しい顔がまじつた。五瀬より少し年かさに見えるその男は、船を直すのに少々手間を取つたと、周りに言い訳した。隣に座っていた男が目でそちらを指した。

「奴だよ。金を見つけた者だ」

「ではあれが、家部宮道か」
やかへのみやじ

飛鳥を発つ直前、五瀬は典鑄司の役人からその名を聞いたことがあつたのである。ほう、という感嘆の聲が酒座に漂つた。

「都の役人にまで名が聞こえておるぞ。大したものだな」

「そりゃ、聞こえるだろう。何と言つても金だ」

皆は口々に感心した。家部宮道はいちいち返事せずに皆が褒めそやすのを得意げな顔つきで聞き流していた。宮道、と一人が呼び、

五瀬を指した。

「宮道。この方は、都から参った鍛戸殿じゃ。お主が見つけた金を錬りに参ったそうじゃから、お主、金を見つけた時のことを語って聞かせよ」

「ほう、わざわざ都から。いいとも、語ってやろう」

宮道は珍しげに五瀬を眺めたが、盃を取って唇を湿し、すぐに語り始めた。皆にせがまれてよほど語り慣れているのか、話によどみがない。

「金を見つけたのは、わしが檜根の銀山に行っておった時じゃ。あれは暑い日で、わしは冷たい水で汗を流したくなって、川へ下りたのだ。しかし、何か妙な勘が働いたとでも言おうか、それとも神仏が導いてくれたものか、ふうっと、いつもは全く行かぬ下手しもての方まで行ってみようという気になった」

「ちよつと待て。わしが聞いた時は、仕事を抜けたのが役人に見つからぬよう、下の方へ足を伸ばしたとお主は言つたぞ」

「おいおい黙れ。邪魔せずに語らせよ」

神仏に導かれたのか、役人の目を盗んだのかはさておき、ともかくも家部宮道の話はこのようであった。

冷たい川流に身を浸して汗を洗い、水から上がった宮道は、ふと視線を落とした足の甲に、何か光る粒がへばりついていることに気がついた。つまみ上げてみたところ、今までに見たこともない、黄金色に輝く砂粒であった。宮道は肝がつぶれるばかりに驚き、しか

し驚きながらも彼はもう一度川に入って底を探ってみた。

ただ彼はこの時、自分が金を見つけたとは思わなかった。銀山が開けて以来、椎根から檜根の一带はしばしば、銀石を狙って盗賊が出没するようになっていた。そうした盗人連中が、財宝の類を川底に沈めて行ったものと思ったのである。

底の砂に両手を沈めてさらうと、黄金色の粒は幾つも上がって来た。砂をすくい上げては金粒を選び分け、四半刻も続けるうち、金粒は手のひらに三十ばかりも集まった。彼はそれをしっかりと握りしめ、無我夢中で役人のもとへ報告に走った。その後の騒ぎは、五瀬が飛鳥で見て来たとおりでである。

「金を掘りあてたおかげで、わしは褒美に銀山の仕事を許された。だが、まことはもつと大きい褒美も貰えたはずであった。と言うのは、始めに川から掘り出した中に、これ程の、わしのこぶし程のものがあったのよ」

「おい宮道よ、かさ上げするのもいい加減にせい。指の先と言うとつたはずだぞ」

さっきの男が横から口を出した。

「分かった、分かった。こぶしというのはさすがに嘘じゃ」

宮道は決まり悪そうに笑って言を撤回した。

「すまぬ。まことを言えば、わしの小指の爪くらいじゃ。しかし水から上がった時に足がもつれてな、倒れたはずみに石の下でばらばらにつぶれてしもつた。あのまま持って行っておればと、今でも悔

しゅつてならぬ」

「小指の。いや、それとてたいしたものだ」

五瀬は驚き、感心した。しかしふと、心の隅に何か引つかかった。何かは五瀬にも判然としない。それこそ砂粒のような、微小な違和感である。齒に挟まったものを舌尖で触るようにして、心の中を密かに手さぐっている

「何だ。わしには親指の先と言つたぞ。ずい分違つてはないか」

誰かが笑いまじりに文句を言つた。

「わしにもそう言つた」

「わしなど足の親指と聞いたぞ」

「宮道、お主の話は語るたびに大きゆうなるな」

皆が一斉に野次つた。宮道は、やかましい、と、目をむいて怒鳴つた。

「せつかくはるばる都から参つた客人だぞ。そのまま語つたのではないか」

乱暴な屁理屈に、座は笑いに包まれた。皆と一緒に笑つうち、五瀬の胸のつかえは夜の中に溶け、心から忘れ去られた。

第五章 椎根にて(一)(後書き)

銅製鍍金の仏像

第五章 椎根にて（二）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

この当時の鍍金技術は焼付け鍍金法と呼ばれるもので、金と水銀の合金、いわゆる水銀アマルガムを用いる技法である。作業の下準備として、金は薄く叩き伸ばし、細かく切る。金は柔らかい金属であるため、薄く伸ばしてしまうと菜でもきざむように簡単に切るこ
とが出来るのである。鍍金を施す銅器の方は、金が乗りやすいよう、梅酢で丹念に拭って表面の細かな汚れを除いておく。

細かく切削した金を水銀と共にるつぽに入れ、五瀬は炭火にかけた。へらでもってそつとかきまぜると、金の薄片はたちまち、水銀の中に吸い込まれるように溶け消えた。あたかも沫雪がみなもに落ちたような速やかさである。水銀は金属と容易に結合して合金を形成する性質を持つのだが、中でも金とは非常に相性が良いのである。

「これは不思議な眺めだ」

るつぽを覗いて三船が思わず声を上げた。五瀬は頷いてみせた。鍍金の仕事は工房で数えきれぬ程やって来たが、この、金が水銀に溶けて行く様は、五瀬も、幾度見ても不思議な幻術を見せられている心持ちがする。

均一になるまで入念にすりませたら、水に浸して不純物を洗う。しかるのちに皮に包んで搾り、耳たぶ程の硬さになるまで余分な水銀を除けば、合金は完成である。

これを銅仏の表面に塗って行くのだが、へらで、しかも塗りむら

の出来ないように一気に塗らねばならない。鍍金の行程において最も難しい作業であるが、しかし同時に職人の腕の見せどころでもある。

そして乾くのを待ち炭火で焙りつけて水銀を蒸散させる。刀の柄飾りのような小さなものであれば、鉄板の上に置いて下から焙るのだが、今回の仏像は大きい上に動かせないため、焼けた炭を鍍金した部分にかざして、水銀を飛ばすことにした。

塗布面が、水銀の色である銀から金色に変化したら、ひと通りの工程は完了となる。ただし一度の加工で黄金色になるわけではない。始めは黒金色に仕上がる。そこで今述べた作業を何度か繰り返し、金の層を少しずつ厚くして行き、更に研磨を行ってようやく、美しく輝く金銅仏が出来上がるのだった。鍍金作業を何度行うかはその時の条件によって異なるが、父親の供養のためということであれば、通常よりも多少多く行い、出来るだけ美しく仕上げたい。少なくとも十回くらいは必要であろうと、五瀬は見当をつけていた。

五瀬を手伝って一年近く精錬にたずさわって来た経験がものを言ったのか、三船は初めての鍍金の仕事にもすぐ慣れた。最初の一日目こそ手を取るようにして教えたものの、翌日からは合金を煮るのも、炭火で水銀を飛ばすのも、五瀬の指示はほとんど必要がなかった。五瀬が銅仏に合金を塗布する間に、三船が次に使う合金を作っておいてくれるおかげで、仕事は予想していたよりもずっと速やかに流れた。

「思ったよりも早く済みそうだ」

大分黄金の輝きを帯びて来た釈迦如来を眺めて、五瀬は言った。鍍金作業はちょうど四回を数えたところであった。

「半月待たずに鶏知に戻れるかな」

「うん、まあ、そうかもしれないが」

五瀬の口が渋くなった。鶏知に帰る、それを考えただけで、今の五瀬には気が重い。戻ったら、あの郡衙の倉に積み上げられた砂金を精錬すべく、再び試行錯誤を繰り返す日々が待っている。しかし正直なところ、精錬を成功させられる自信は五瀬にはもはやなかった。積み重ねてきた数知れぬ失敗の中で、試すべきことは全て試したように思われる。一体、まだ見落としている何かがあるのか、それとも失敗の原因は全く違うところにあるのか、いずれにせよ、闇夜の川で砂粒を手さぐるような話であった。腹に砂金を呑み込んで高くそびえる正倉の大きな影が黒々と心にのしかかって、五瀬は息がつかまる思いがした。

「金が鍊り上がる日が来るようには、おれにはとても思えぬ」

夕刻、向かい合って飯を噛みながら、五瀬はこぼした。

「ふむ……。しかし、だからと言ってやめるわけには行かぬのであるろう？」

「そういうことだ。上も下も分からぬというのに、泥の中でただ、もがき続けていなければならぬ」

五瀬はいまいましたげに舌打ちした。ふた月ばかり前、視察に来た国衙の役人に股ぐらを蹴り上げられた時には、金を上げられぬ咎で首を刎ねられるのが恐ろしかった。しかし心労が積もりに積もった近頃では、むしろ朝廷の役人が刀を片手に怒鳴り込んで来た方が楽

かもしれぬと、そんな思いが、半ばやけくそ気味に心の隅に顔を出すのだった。

鍋をかけていた後には、まだ火が残っている。休む前に疲れた体を温めておこうと、二人は残り火にあたった。

「お主がいなかったら、おれはとつくに、海に飛び込んでいるな」

火にかざした手をもみながら、ぽつりと五瀬は言った。

「何のことだ」

「いや、そのままだよ。お主に、お主の気がねのない心安さにおれはどれ程助けられておるか分からぬのだ。腹立たしいことや、苛立つことがあっても、こうしてやって行けるのは、お主のおかげだ」

「……」

「そういえばお主は、会った始めから、おれに物怖じや遠慮をしなかったな。奴婢のくせにぶてぶてしいと呆れたこともあったが、だがそれがなければ、おれはお主とこうして心安くはなれなかった。ありがたいと思うておるのだ。もしも、それこそ主と奴婢の間柄であつたら、この毎日はつらいよ」

そう言つて、五瀬は笑つて見せたが、しかし五瀬の笑顔に三船は応えなかった。むっつりと押し黙った顔が、うつむいた。燃えさかる火に炙られて眉が焦げそうだった。しばらくそうしていたが、

「それは違つ」

急に、三船は首を振った。声に苦さがあった。

「違うのだ、五瀬。 五瀬、わしはお主にすまぬと思うておる」

妙なことを言い出した。しばらく気まずそうに言いよんどんでいたが、鶏知に来るすぐ前のことだ、と話し出した。

「あの時、役人に呼びつけられ、都から参った金鍛冶の手伝いに、鶏知へ行けと言われた。話を聞いてわしは嫌で仕方がなかった。国衙を見れば分かるように、都の人間は威張りくさつてろくなことをせぬ。そういう者と二人きりで、何やら仕事をせねばならぬとは、全く気の重い話であった」

「国衙の役人の乱暴なことは、おれも村の連中から聞いた。しかし……」

「いや、話したいのはそこではない。巖原を発つ直前、仲間の一人が、何処からお主のことを聞いて参ったのだ。その鍛冶は、都人とは言つても雑戸という身分だと。奴婢ではないが奴婢とさほども違わぬ卑しい者であるらしいとな。

わしはしめたと思うた。これからわしの主となるその雑戸に、たとえどんな目に遭わされようとも、所詮わしと変わらぬ賤民ではないかと、心の内に蔑めばよいと、気が軽うなつた。 それゆえ、お主と初めて口をきいた時、良民ではなかったかと言われて、わしは腹の底が冷えた。お主はわしを、殴りつけも蹴りつけもせなんだのに、わしはずつとお主を蔑んでおつた。それを見透かされた思いがした。蔑まれる辛さをずつと舐めて来たわしが、蔑むべきではない者に蔑みを向けてしもうた。詫びて済むものではないが、すまぬと思うておるのだ。あの頃のことには触れられては、心苦しい」

五瀬は咄嗟に返す言葉がなかった。三船は再びうつむき、しばらく火にあたるそぶりをしていたが、そういうことだ、と一言つぶやき、立ち上がってそのまま自分の小屋へ行ってしまった。小屋といつても名ばかりの、御堂の傍らに立つ大木の幹に木をもたせ草でふき、屋根と壁にただけのものである。草のすれ合う音がして、五瀬は沈黙の中に置き捨てられた。

陽が、西の山の端に隠れた。水に没して行くように、闇が徐々に地に下りて来る。水と違うのは、光が失われるにつれ、風に運ばれて種々の匂いが満ちて来ることである。潮の匂いや魚の生臭いにおい。これは盆地に生まれ育った五瀬には今もって、異国情緒をかき立てる匂いであった。芽吹きつつある草木の匂い、岩板の隙間を選つてわずかに開かれた畑で、土が起こされているのか、新鮮な黒土の匂いも、切れ切れに入りまじって届いた。

匂いが鼻先を行き過ぎるのにまかせながら、五瀬は、膝元に並べてあつた小枝を取り上げ、火に投じた。もう一本、さらに一本、枝を呑み込むたび、火は息を吹き返したように明るく炎を躍らせた。五瀬の目はしかし、火を見ていなかった。といって、三船をも見ていなかった。見ていたのは故郷にいた奴婢の姿であった。

郡司の館などには大勢の奴婢が使われており、村の周りでも時折姿を見かけることがあつたのだつた。彼らを見かけると、子供の五瀬は日頃自分たちが受けている以上の嘲弄をありつたけ、つるばみをまとつたその背に浴びせた。相手が自分と同じ子供であつたりすると、泥の玉や時には石つぶてまでぶつけ、衣の裾に大事そうに包んだ木の実を取り上げては、面白がつた。

どんなむごい目に遭つても、奴婢たちは何も言わなかった。ただ目を伏せ、道の端をうなだれて歩いて行くばかりだったが、しかしその中には、今しがた三船が吐露したのと同じ感情、雑戸などは奴婢と変わらぬではないかという侮蔑が、強く刻まれていたに違いない。そうしてみると、それを裏づけるようなことは、確かに思いあたるのだった。

考えるうち、五瀬は御堂の隅に敷いたわらの中に倒れ込んだ。うとうとと浅い眠りを漂い、目を開けた時もまだ、頭はあれこれとものを考え続けていた。

閉め切った扉の隙間から、糸のような朝の光が淡くにじみ込んでいた。手を伸べると染み入るように温い。五瀬は御堂の扉を押し開いた。静まり返った地面を石英のような朝日が流れている。

「三船」

声をかけてみた。

「朝げを炊こう。手伝うてくれ」

やがて草が動いて三船が顔を出した。顔色が少しすぐれないところを見ると、三船もまた、五瀬と同様に昨夜はよく眠れなかったらしい。

炉の周りに、二人は顔を集めた。五瀬が小枝を組み上げ、三船が火をおこした。その間に五瀬は米を洗い、鍋に仕込んで、火にかけた。型どおりの、昨日までと寸分も形変わらぬ、飯仕度の眺めである。枝をくべるうち、ふたの隙から湯気が上がり始めた。杓子を取

り上げ、五瀬は二つの椀に粥をよそった。いつもよりも、多くも少なくもない。椀の一つを三船に出した。見慣れたしぐさで、三船が椀を受けた。

「のう、三船よ」

ぼつんと、五瀬が言った。

「うん」

「お主は、おれの友だよ」

友と、三船に向かって初めて、五瀬は口にした。

「おれにとつて、大事なことはそれだけだよ」

昨夜、閉め切った闇の中で五瀬は、人を蔑むことの暗さと醜さを初めて噛みしめた。憂さ晴らしに奴婢をいたぶった自分も忌まわしいが、密かに雑戸民を蔑み、慰みとした奴婢どももまた、忌まわしかった。殴られようが足蹴にされようが相手を蔑んでおれば腹も立たぬという、三船の抱いた感情もまた、忌まわしいと思った。侮蔑とは人の心が抱えるうちで最も醜い闇であった。がしかしだからこそ、その憎むべきものために、三船との間に築いて来た友の情を穢されるべきではなかった。

三船は初めて顔を上げた。

「わしのような者を、友と呼んでくれるのか」

「うん。お主も、おれを友と呼んでくれぬか」

三船は腕に顔を伏せた。小さく、鼻をすすり上げる音がした。

第五章 椎根にて(三)

* * * * *

防人を十人ばかり引き連れて、武官が椎根にやって来た。前日のこと、漁に出た村人が小島の陰に不審な小舟が隠れるのを見た。新羅の海賊かもしれぬとの報を受け、警備のために榎根の銀山から来たのだった。

盗賊たちの目的は椎根の村ではなく、榎根の銀山である。が、銀山のある榎根は内陸の奥であり、しかも深い山谷さんくに囲まれているために、椎根にある河口部から佐須川を上って行くより他、道はない。逆に守る側からすれば、椎根に兵を置き、上陸したところを捕えるのが最も守りやすいということになる。

「何事もなければよいが。何しろ相手は鬼畜だから」

急にものものしくなった海岸を遠目に見ながら、村人は不安げであった。盗賊の一番の目的は銀山を襲って銀石を奪うことだが、それは途中の村々が無傷で済むということにはならないのである。防備が固過ぎるために銀をあきらめ、代わりに付近の村を荒らして帰る者もあるし、行きがけに通りすがりの村に押し込む賊もある。特にこの椎根の浦里は、前述のように上陸地点にあたっているため、賊が出ると大きな災いに見舞われることが多かった。穀物や家財、人が奪われることすら珍しくない。命が助かるなら物くらいくれてやるのだが、しかし殺戮が目的のような気違いじみた輩もいるから、村人は言葉の端に恐怖を滲ませた。

鶏知では、銀山が開かれてから盗人が増えたのが少々困りものだ

などと言っていたが、常に海賊の吐く息を耳元に感じて暮らしている椎根の人々は、困りものどころの話ではない。憤る気力も既にしぼみ、まだ日が高いというのに、おびえた様子で家の戸じまりに使う木や石を運ぶ姿があちこちに見られた。

昼過ぎ、五瀬が御堂で仕事をしているところへ不意に武官が訪ねて来た。何事かと恐る恐る出て行くと、武官は、都の話聞きに来たと、呑気なことを言った。

「都の話、でございますか」

「おう、左様じゃ。わしはここへ来てもう三年にもなる。懐かしゅうてならぬのだ。おぬしはつい昨年来たばかりというから、わしの知らぬ様子など知っておろう」

「はあ。しかし都と申しましても、我は飛鳥谷の工房しか存じませぬが」

「なに、都の話であれば何でも構わぬ」

「貴方様の望むような話が出るかどうか」

「構わぬと申しておろうが。さつさと語らぬか」

武官の後をついて村のあちこちを歩きながら、五瀬は工房で耳にした巷の噂話などを、思い出しては語って聞かせた。それは、ある村で雀が黒い雛を産み、吉兆であると噂になったとか、または、とある木に季節はずれの花が咲いたというので人々がこぞって見に出かけたとか、そんなどうでもよい話ばかりで、五瀬は、武官が今に怒り出すのではと内心ひやひやしたのだが、しかし聞いている武官

の方は、怒るところか機嫌良さそうに口元を緩め、時には笑い声まで上げていた。どうやらこの男は、都のにおいをまだ体に残している者が語る「藤原の宮城」とか「都の大路」といった懐かしい言葉が聞ければ、それで十分に満足らしかった。

話を続けながら、二人は海岸の方まで来た。砂浜に防人の兵士が二人、簡単な肩あてと胸あてをつけ、弓を持って立っていた。見張りである。武官の姿に目を止め、姿勢を正してから一礼した。

「お主。東国者と話したことはあるか」

防人たちをちらりと見て、武官が訊いた。五瀬はないと答えた。

「ないか。それは幸いだ。連中は何を言うておるか分からん。口を開いておると苛立ってしょうがないからな」

武官は鼻先で小さく笑った。

「奴らは菰をケメと言う。恋しをクフシと言うし、小枝はコヤデだ。しかもその音がいちいち奇妙と来ている。今もって慣れるということが出来ぬ。奴ら、見た目はわしやお主のような大和人と変わらぬが、やはり人ではないな」

蔑んだ視線を今一度、海を見張って立つ防人たちに送り、武官は体を揺すって大きな笑い声を響かせた。

雑戸の体には生まれつき、穢れた血が流れている。それゆえに下層民に落とされているのだと、五瀬たちは繰り返し、嘲られたものだった。雑戸の卑しいことは、いわば神が定めたもので、幾らあがこうともそれは決して変わらないのだと教え込まれ、五瀬もそれを

疑うことなく来た。

しかし、鶏知で五瀬は、賤民どころか普通の良民と変わらぬ遇を受けた。それは対馬の人が雑戸民を知らぬゆえであった。

そして今、都から来た武官は明らかに、良民であるはずの防人たちを、雑戸である五瀬の下に置いていた。それは異郷の良民よりも大和の雑戸の方に、より親しみを覚えたという、ただそれだけのためだった。

如何にも愉快そうに蔑みの笑いを響かせる武官の横顔を、五瀬は複雑な思いを呑んで見つめた。

* * * * *

その夜、眠っていた五瀬は、深い闇の向こうから沸き起こった遠音に、耳を覚まされた。小さくて明確には聞き取れぬが、様々の物音が雲のようにまじり合い、もつれ合って、切れ切れに耳に触れて来る。不安を覚え五瀬は急いで身を起こした。扉をわずかに開けると、闇が冷たく鼻先をかすめた。辺りがとりあえず平靜なのを確かめてから、三船が寝ている小屋へ走った。

草をめくって声をかけると、三船は既に目を覚ましていた。

「盗賊が来たらしいな」

「おれもそう思っただけに。今夜は堂に来い。こんな小屋じゃひとたまりもないぞ」

三船を連れて御堂に駆け戻り、五瀬はびつたりと扉を閉ざした。

門の類がないため、せめて開きづらいようと、扉の間に仕事に使うへらの先を打ち込んだ。

闇にふさがれて耳が研ぎ澄まされて来ると、音が徐々に明確になった。やはり大勢の人間の怒号である。かすかだが金属のぶつかり合う音もまじっていた。

「おれが童の時分、隣村が賊に襲われたことがあったよ。あの晩のことを思い出すな」

「何だ。都はもつと穏やかかと思うておったが」

「いや、むしろ物騒かもしれん。どこそこに盗賊が出たという話はしよつちゆう聞こえて来た。おれたち雑戸の村は貧し過ぎるゆえ、襲われたことはなかったが」

藤原京の造営に大勢の民を動員した結果、田畑が荒れ、村を捨てて逃亡する者が都周辺で相次いだということは、既に述べた。しかし村を捨てたとて、彼らに行くあてがあるわけではなかった。歌や踊りや、何か芸能に秀でていれば、乞食になり、国々を流浪することも出来たが、大抵は盗賊になるより他なく、そのために都には多くの盗賊が跋扈していたのだった。

「やはり浜の方だな。こつちまでは来るまいが」

三船が耳をそばだてた。

「昨日、件の武官について浜へ行ったのだ。あそこで殺し合いをやっているかと思うと、嫌な気分だ」

叫び合い、斬り合う音は、闇の底から、時に湧き上がり、時に滲み上がっては、波が引くようにまた消える。大きくなり、小さくなり、近づいたと思うと遠ざかった。そのまま、長い、息のつまるような時が過ぎ、一晩中夜を冒し続けた物音はいつしか、しじまに溶け入るように去った。

三船が立って、扉を薄く開けた。五瀬も一緒に、そつと表を窺った。朝の透明な光の中に静寂だけがある。扉のきしむ音が大きく響き、すぐ消えた。

出てみると、それぞれ家の外に様子を見に出て来た村人の姿が、ちらほらと見えた。一樣に安堵の面持ちであった。互いの無事を喜び合い、荒らされた畑などがないか調べているところに、知らせが届いた。海賊が一人、捕えられたという。恐れと好奇心のまじった目をしばし見交わし、村人たちはぞろぞろと広場へと向かった。五瀬も三船とそのあとに続いた。

広場には広兄の姿が既にあつた。皆が固唾を呑む中、武官が鎧兜に身を固め馬に打ちまたがって悠々と姿を見せた。あとに二人の次官と防人の兵が続いた。賊は列の最後尾にいた。両手を胸の辺りで縛り上げられ、縛った縄は長く伸びて兵士の手握られていた。家畜に縄をつけて連れ歩くのに似た有り様だった。

「賊は追い払った」

広場の中央に馬を止め、武官は鞍上から誇らしげに叫んだ。広兄が進み出、礼とねぎらいの言葉を述べてこつべを垂れた。

「賊の処置は如何様になりましょう。国衙に連れて行かねばならぬのでございましょうか」

「広兄は訊いた。それについては自分に一任されている、と武官は言下に答えた。」

「対馬県、お主に決めさせてやっても良い。彼奴をどうする」

「では死罪を望みまする」

「奴婢にする手もあるぞ。お主の財になる」

「広兄はきっぱりと拒絶し、あくまでもこの場で賊を処刑することを望んだ。この椎根の村は今まで幾度となく新羅の海賊にむごい目に遭わされて来たのだと、広兄は怒りを抑えた声で語った。財を奪われた者、家族の命を奪われた者は幾人になるか分からない。かく言う広兄の父も、盗賊から受けた刀の傷がもとで、命を落としていた。」

「わが屋敷では今年、父の法要を行います。それを前にこうして賊が捕らえられたことは父の導きにございましょう。血で償わせ、供養と致したい」

「よかるう」

「広場に、奇妙な光景が展開された。村人を下がらせ広い空間を作ると、盗賊の男が中央に引き出された。続いて一頭の馬が引かれて来た。首をねじり、盗賊は馬を見た。それからゆっくりと首を回し、遠巻きに取り囲んでいる村人をぐるりと見渡した。そのとき初めて五瀬に盗賊の顔が見えた。尖った鼻筋と、鋭い大きな目を持った若者であった。長い眉や目じりが不自然に吊り上がっているのは、大きな目を更に見開いているためであろう。食いしばった薄い唇には、

しかしまだ幼さが残っていた

手首から伸びた縄の先が馬の鞍に結びつけられた。兵士がひらりとまたがり、馬に鞭をあてた。ゆっくりと馬が駆け出した。縄に引っ張られるために盗賊の若者も走らねばならない。馬上の兵士は手綱を巧みに操り、馬の足を徐々に速めた。若者は必死に走ったが、やがて速度について行けなくなった。もんどりうって倒れ、地面をずるずると引きずられた。そのまま広場を一回りして、馬は止まった。

兵士が何か叫んだ。立て、と言ったのだらう。若者は言われるままに立ち上がった。再び、馬が走った。徐々に速度を速め、よろめいた若者を引いて同じように広場を回り、止まった。

馬の足が止まると、若者は今度は自分から立った。倒れたはずみに打ちつけたのか、むき出した歯に血がしたたった。馬上の兵士を振り仰いだ目は蛇のように鋭かった。赤々とした怒りの色が燃えた。

それから何度となく、若者は馬に引かれて走り、倒れては引き回された。白い頬は汗とほこりで黒く汚れ、衣はあちこち血が滲んだ。若者がなぶられるのを、取り囲んだ村人たちはじっと凝視していた。浴びせられる罵声もなかったが、その代わり哀れみのまなざしもなかった。感情を殺した注視に、かえって人々の憎悪が凝っていた。

新羅の若者もまた、一声も発しなかった。人々の視線の中、うめき声もたてずに犬のように走らされ、引きずり回された。朝の明るい陽光の下で、広場に二つの憎悪が対峙していた。財や家族を奪われた者の憎悪と、いたずらに命を弄ばれ、屈辱を与えられ続ける者の憎悪と。遙か遠くの梢で、小鳥が軽やかに鳴き交わすのを、五瀬の耳は聞いた。

何度目かに地面をわら人形のように転がされたあと、若者の力は尽きた。両足をあがかせ縛られた手で地面をかきむしって、彼は意地になって立ち上がろうと試みた。が、尻がわずかに持ち上がっただけで、砂ぼこりの中に倒れ伏した。

「立たぬか」

兵士が縄を手荒に引いた。若者の体は動かない。ただ、うつぶせになった背が呼吸だけはしている。

「もう、よかるう」

見守っていた武官から、声がかかった。は、と短く答え、兵士は鞍から降りた。腰に帯びていた刀をすらりと抜いた。

若者が、地面から顔を上げた。ほこりまみれの顔のすぐ前に、抜き放った刀身の切っ先があった。肘を突っ張り、よろめきながら若者は渾身の力で立ち上がった。刀を見て逃げ出そうとするかと思えば、そうではなかった。顎を上げ、目を見開いて、彼は処刑人の目をぐっつと見据えた。

兵士の手が若者の肩をつかんだ。刀が一閃し、左の脇の下から真横に、深々と体を貫いた。若者の大きな目は食い入るように、兵士の目を覗き込んでいた。やがて、一度、それからまた、一度、目は瞬きをした。支えを失ったわら束のように、若者の体はひとかたまりに地面にくずおれた。

周りから防人の兵士が歩み寄り、両足をつかんで広場から死体を引きずり出して行った。なりゆきをじっと見守っていた村人たちは、

それぞれ小さなため息を残し、背を向け黙然と立ち去った。わずかの間に、村の広場はまぶしくなり始めた朝日の満ちる、普段どおりの光景に戻っていた。死体が転がった土の上には黒いしみが名残をとどめていたが、すぐに陽光に乾き風に散ってしまうと思われた。

五瀬は皆について広場をあとにし、しかし御堂には戻らずそつと村はずれの雑木林に歩を向けた。踏み荒らされた草の跡をたどり、ようやく、櫛の木の下に打ち捨てられた死体を見つけた。こぶだらけの根を枕に若者は窮屈そうに横たわっていた。頭が大きく反り返り、ここまで引きずられて来る間にとけた髪が、黒い血のように頭の下に広がっていた。両手が縛り上げられたまま、胸の上におとなしく乗っている様が、どこか滑稽であった。

若いむくろの傍らに、五瀬は膝をついた。この名も知らぬ若者に、五瀬は十五の時の自分を重ねずにはいられなかった。罪人として兵士になぶり殺された様はそのまま、磔来を殴りつけたために大人たちに叩きのめされた五瀬の姿であった。殺されて行く盗賊を、怒りの感情も見せず眺めていた村人の目はそのまま、血にまみれて倒れた自分を見下ろしていた大人たちの目であった。

若者の目は倒れてなお、見開き空を見つめていた。そのおもてに苦悶の色はなかった。しかし、それは死んで安らぎを得たのではあるまい、苦痛と屈辱に耐えて魂をすりつぶしたのだらうと、五瀬は思った。

五瀬は手首の縄を解き、目を閉じさせてやった。硬直は始まっていないうちだが、若者はなかなかまぶたを閉じようとはせず、半ば無理矢理閉じさせねばならなかった。しばらく死に顔を眺めていたが、ふと気がついて、天を仰ぎ任那の祝詞を低い声でうたった。血をたどれば兄弟であるかもしれぬ、新羅の若者であった。三田一族

の祖霊が降り、何卒この者の魂を海の方へ運んでくれるように
。梢に閉ざされた木こくばら暗い天へ、五瀬は遠く、祝詞をうたい上げ
た。

(第五章・了)

第六章 金の正体（一）

予定していた十回の鍍金が、ようやく終わった。あとは鍍金の表面をならず、へら磨きの作業が残るばかりであった。合金は粘土のように固いたために、水銀を飛ばしたあとの鍍金面には大小の凹凸がどうしても残ってしまう。それを鉄のへらでもってなでつけ、美しい光沢が出るよう、なめらかに磨き整えるのである。

磨きをほどこすのは額や頬など広い面ばかりではない。宝冠のような細工の細かい部分まで、小さなへらを用いて一つずつ、根気良くならして行く。御堂にこもり、五瀬は一日中、磨きをかける作業に没頭した。

鍍金面をじつと凝視しへらを動かし続けていると、五瀬の目と心はしだいに金の中に埋没した。椎根も鶏知も、砂金も都も、仏の姿そのものすら、金の色の下にうずもれてしまう。この世の全てが消え去り、そうして決まって心を訪うのは、あの、新羅の若者の顔であった。仏像のおもてが輝きを増すほどに、切り抜いたように大きな目や、鋭く彫った鼻梁、濡れたような黒髪は、ありありと眼前に鮮やかさを深めた。村人をぐるりと見渡した時の顔が浮かぶこともあった。鞍上の兵士を見上げた、怒りに燃えた顔のこともあった。そしてじつと空を見上げた死顔が眼前を訪れることもあった。異国で命を奪われた盗賊のために、五瀬は一心に金仏を磨いた。法要を控えているはずの広兄の亡父のことは、心の中から忘れ去られていた。

日に二度、朝夕の飯は三船が知らせてくれた。へら磨きの作業には技が要る。こればかりは三船も手伝うというわけには行かないため、代わりに飯の仕度を受け持っているのである。

金の海に吞まれて死者の世をさまよっていた五瀬の心は、三船の顔にうながされて、生者の世界に戻って来る。三船の目には、五瀬の様子がどこか尋常でないのが分かったのだろう。

「五瀬、あまり根をつめぬ方がよい」

幾度か忠告した。しかし五瀬がなかなか耳を貸さぬために、どこからかノビルを摘んで来て、仕事の合間に食べと言って差し入れてくれた。

なめし革で最後のつや拭きを行い、ようやく鍍金は完了した。

「おう、これは見事だ。まこと釈迦如来が降り参らせたようではないか」

知らせを受けてやって来た広兄は、御堂の薄闇を払って燦然と輝きを広げる金銅仏の尊顔に、感じ入って声を上げた。香炉に香木をくべ、うやうやしく如来像の前にぬかずいた。広兄の妻子や縁者、家臣らも続々と御堂を訪れた。皆が出来映えに驚き、感嘆して口々に褒めそやすのを、五瀬は少し離れた所に立ち、夢から覚めたような表情で聞いていた。広兄が差し招いた。

「都の鍍金の腕をしかと見せて貰うた。これは褒美だ」

広兄は衣をくれた。見れば珍しい綿布の衣であった。五瀬はありがたく頂戴した。

五瀬は仕事場を引き払った。道具をまとめ、炉を埋め、御堂とその周りを丁寧に掃き清めた。あとは、再び船に乗り鶏知に帰るばかり

りだった。広兄に最後の挨拶を済ませ、三船と、付き添って来た家人らと共に、五瀬は村を出た。船着き場が見えて来た。潮の香の中に船が波に洗われていた。一行の姿を認め、船頭が立ち上がった。

と、五瀬の足が止まった。

「どうした」

気づいた三船がいぶかった。家人も不思議そうに立ち止まって振り返った。皆の視線の先に五瀬の表情は少し硬い。

「
すまない」

口早に言った。

「皆、すまないがここで待っていてくれぬか。すぐ戻るゆえ」

仕事道具などの入った包みを慌しく三船の手に押しつけるなり、五瀬は皆が呆気に取りられている前を奔馬のように駆け出した。

「ああ、お主。やかへのみやし家部宮道はおるか」

村へ駆け戻り、五瀬は最初に目に止まった村人を捕えて聞いた。

「宮道？ 奴なら家におったはずだが」

「呼んで来てくれ。手数をかけるが、頼む」

宮道はじきに来た。

「お主、初めに金を見つけた時、小指の爪ほどの粒があったと語っておったな」

声低く五瀬は訊いた。宮道は五瀬のただならぬ視線に気圧されて、無言で頷いた。

「その砂金の粒、石の下で、ばらばらにつぶれた、と言ったな」

「ああ、そのとおりじゃ」

「その、金がつぶれた様をよく聞きたいのだ。砂金は」

五瀬は思いついて、足元からちょうど爪くらいの大さの土くれを二つ拾い上げた。一方を唾で湿し、二つを手のひらに並べた。宮道の見ている前で、五瀬はまず唾で湿した方の土を指でつぶして見せた。水気を含んで粘土状になった土は餅のようにべったりと平たくひしゃげた。次に乾いた方を押しつぶした。こちらは指の下でもろく砕け、細かな土の粒になって崩れた。

「金は、どのようにつぶれた」

五瀬のするのを見守っていた宮道は、考え込む様子もなく指を上げた。指先は黙って、細かい粒に砕けた土くれの方を示した。

船着き場で待つ一行のもとへ、五瀬が戻って来た。

「何事かと思うたぞ。あのように慌てふためいて戻ったところを見ると、さてはおなごか」

家人の苦笑いに、五瀬は困ったような作り笑いを返し、そそくさ

と船に乗り込んだ。やはりそうか、と、家人と兵士は笑い声を立て、笑いながら船べりをまたいだ。最後に三船が乗り込んだ。櫓が鳴り、船がすべり出した。

家人と兵士とは船に乗ってからもしばらく、女のことではきりと五瀬をからかったが、五瀬ははぐらかしてばかりいた。二人はじきに飽きて、若い時分、村娘のもとへ通っていたという思い出話に花を咲かせ始めた。質問せめから解放されて、五瀬はほっと船べりにもたれ遠方へ目を注いだ。船の景観を愉しんでいるようだったが、しかしその目は行き過ぎる島影をまるで追っていないかった。まばたきも忘れ、ただ宙の一点を凝視していた。唇は血の色がさめ、時折思いつめたようにかすかにわなないた。

浅茅浦を渡り、船は鷄知に帰り着いた。帰参の挨拶に屋敷を訪うと、国麻呂は用があつて敵原の国衙へ出かけているとのこと、留守であつた。五瀬は屋敷裏の自分の小屋へ戻つた。

奴婢小屋へ戻つたと思つた三船が、小屋の傍らに立つて待っていた。

「五瀬、何があつたのだ」

三船が訊いた。五瀬は歩み寄つて来た。唇をじつと食いしばつたままやおら、三船の腕をつかんだ。

「三船」

咽がうめいた。

「船に乗った時からおかしいと思つておつたのだ。五瀬、何があつ

た。何のために村に戻った」

三船の手が肩を揺すった。五瀬はぐつと眉を上げた。見上げた目が血走っていた。三船、対馬の金は、血を絞り出すような声が齒の間から洩れた。

「三船、対馬の金は、樫根で掘っておるあれは、金ではないぞ」

「何」

驚くあまり大声を上げそうになり、三船は咄嗟に自分で自分の口をふさがなければならなかった。

「分からぬ。金ではないとは、どういうことだ」

声を押し殺した。

「話すより先に、あの倉に積み上げられた金を調べてみなければならぬ」

二人は樫根から運ばれた砂金が保管されている倉へ向かった。途中、五瀬は道端から手のひら程の平たい石を二つ、袂に拾った。倉番に鍵を開けさせ中に入った。日はまだ充分に高いが、窓というものがない正倉の中は冷たく暗い。五瀬は箱から砂金の粒を幾つか、つまみ出した。三船に明かりを持たせておいて、床に石を置きその上に金を一粒乗せた。石が打ち下ろされた。鋭い音がしたと思うと、黄金色の碎片がぱらぱらと床にこぼれた。五瀬はもう一粒、同じように石で打った。これも細かな屑に砕けた。次のも、その次のも、箱から取り出した砂金は皆、石に打たれ無残に砕けこぼれた。

五瀬の唇から太い息が洩れた。三船には何のことか分からなかった。

「金は、砕けたりはせぬ」

一言、五瀬は答えた。床にこぼれた金の細片を指でつまみ上げ、じっと凝視するまなざしが、苦しげであった。

「三船、鍍金をやった時、金を薄く叩き伸ばしてから削ったのを覚えておろう。柔らかいのが金だ。打ち据えれば平たく伸びねばおかしい。このように細かく砕けるわけではない」

絶句して、三船は苦しげにゆがむ五瀬の顔を見つめるしかなかった。やがて砕けた金の粒をつまみ、明かりにかざした。塵の如く砕けてなお、研ぎすまされた、針のような光を放っている。

「そう言われてもにわかには信じられぬ。わしには金にしか見えぬ。金でないとなれば、一体これは何だ」

「分からない」

五瀬はがっくりと声を落とした。

樫根で大量に採掘された金とは、黄銅ウツロウ鉍びんであった。銅と硫黄が結合した硫化鉍物で、銀鉍脈の中に銀と共に含まれていることが多い鉍物である。美しい黄金色とつややかな光沢を持ち、一見しただけでは見分けがつかない程、金とよく似ている。

金が発見された場所はまさに、銀山の下流部であった。恐らく銀山の鉍脈に含まれていたものが雨などで洗い出され、長い年月のう

ちに佐須川底の砂中に堆積したのであったのだろう。

三田一族はあくまでも金の加工技術に特化した職能民である。錬金や鍍金の知識はあっても、砂金やその採掘にかんしては、ほとんど何の知識の蓄積もない。ましてや砂金とよく似た鉍石が存在するなど知るはずもない。金と黄銅鉍との区別が五瀬につかなかったのも、無理からぬことであった。

第六章 金の正体（二）

「しかし五瀬」

三船は食い下がった。

「るつぼの中には一度きりだが間違いなく金が上がった。あれはど
ういうことだ」

「もはや憶測するしかないが」

苦い口調で五瀬は答えた。

「全てがまがいものというわけではなく、掘った中には本物の金も
多少混じっているのだと思う。そしてあの時取り出した粒には、た
またま金の方が多かったのだ。釈然とはせぬがそうとしか考えられ
ぬ」

「真偽が混じっておるのか。真はどのくらいと思う。半々といった
ところか」

「いや、あれ以外は金の影も見えなかったところを見ると、ほんの
わずかだろう。これから調べてみようと思うが、どのみち都に献上
出来るような代物ではあるまい。しかしこうなってみると、あ
の時たまさか上がった金が逆に恨めしくてならぬ」

五瀬は低い笑いを洩らしたが、それは暗くうわずっていた。

二人は、先程まで金であった砂粒を箱からつかみ出しては、石で

打ち砕き始めた。ほとんどの粒は虚しく砕けたが、しかしごくまれには、砕けずに平たくつぶれるものも、五瀬の予想したとおり混じっていた。

「椎根の村に行ったその日、村の者らがおれを酒宴に呼んでくれたらう」

興奮が少しおさまった五瀬は、砂を叩きながらとつとつと話し出した。

「そこに、家部宮道という者があって、金を見つけた時の話を語ってくれたことは、話したな」

「聞いた」

「うん。それで、これは話しておらんかったが、宮道はこのようなことを言っておったのだ。一番始めにすくったものの中には、小指の爪ほどの大粒の金があった。が、誤って石の下じきにして、ばらばらにつぶしてしもうた、とな」

また一つ、五瀬の手の下で砂粒が細片になった。五瀬は手のひらに集め、傍らの箱に捨てた。

「それを聞いた時、おれは何か妙な気がしたものだ。だが何を妙だと思ったのかは、おれにもよく分からなかった。村を去る段になってようやく気がついた。宮道の言った、ばらばらに、という一言が、ずっとひっかかっておったのだ。お主らを待たせて村へ戻ったのは、砂金の粒がつぶれたというその様を、宮道にくわしく問いただすためだ。思ったとおり、平たく伸びたのではなく、小さな破片に砕けたと言ったよ」

「それでお主、その男には明かしたのか」

「奴が見つけたのは金ではないとか？ いや、言わぬ。話していた時の得意気な顔を思うと、とても言えなかった」

全ての砂を調べ終えた時には、日は夜を越えて早暁を迎えていた。五瀬の手には、ほんの一つまみばかりの砂金が、選り分けられて残った。

工房に戻り、五瀬はそれをるつぼにかけた。金と鉛が溶け、赤く灼けた。るつぼの底を焼きながら染み込んで行くところもこれまでと変わらなかった。しかし、

「おお」

ふいごを手にするつぼを見守っていた三船が、驚愕の声を上げた。わずかに残った湯の底から、まるで火の衣を脱ぎ去るようにして金色の粒が忽然と現れた。練り上がった金は真円である。焼けた石肌の上に黄金色の真珠が横たわったように美しかった。

次に、五瀬は粉々に砕けた砂をかき集め、同じようにするつぼにかけた。結果は言うまでもない。鉛も何も全て蒸散してしまい、残ったのはるつぼの焦げ跡だけだった。

「これではつきりした」

五瀬はつぶやいたが、声は重苦しかった。成程これまで錬金が成功しなかったそのわけは突き止めることが出来た。しかしそれは同時に、朝廷の期待を一身に負った金の精錬事業が完全に頓挫とんざしたと

いうことでもあった。脂汗をじつとりと額ににじませ、二人は黙然と顔を見合わせた。

「五瀬、これはもはやお主の仕事ではない」

やがて三船が重い口を開いた。五瀬はため息と共に頷いた。

「そうだな。金でない以上、おれには何とも出来ぬ。国麻呂様が戻りしだい、報告せねばなるまい」

* * * * *

翌日、国麻呂が屋敷に戻った。

五瀬から事のしだいを聞いた国麻呂は、驚倒うろたするあまり魂が吹き飛んでしまったようだった。

「何だと」

大声を上げたつもりであったが声は出ず、魚のようにばくばくともがく口から、いたずらに息の音ばかりが洩れた。

国麻呂の前に、五瀬は二つのるつぼを差し出した。一つは黒く焦げただけの空のるつぼである。もう一方には底に丸い金が転がっている。これまでの経緯を、五瀬は順を追って語った。

「つまり、この対馬で出た金は、金とよく似たまがいものであったと、お主はごう、申すのだな」

話を全て聞き終え、国麻呂はしゃがれ声を絞った。唾を飲み込ん

だ咽がごろりと鳴った。

「はい」

五瀬はうつむき、声を落とした。対馬の金は、金ではなかった。それは誰が責められることでもなかったが、しかし五瀬は国麻呂の顔をまともに見るのが苦しかった。

「正倉の中の砂を全てあらためました。実を申せば本物の砂金も混じっております。しかしそれはごくごくわずかでございました。あれほどの中に、たったひとつまみ、このるつぽに転がっておりますが、全てでございます。とても帝に献じられるものでは」

「……たわけたことを！」

いきなり、気が違ったように国麻呂はわめいた。

「たわけたことを申すな！」

気づくのが、一瞬遅れた。目の前に沓くつの先が見えたと思った時には、五瀬の体は蹴り飛ばされ後方へもんどりうって転がった。

「この、恥知らずめ」

わめく声と共に、背や頭に両腕の殴打があられのように降りそそいだ。

「金ではないなどと、よくも左様なことを。左様な恥知らずなことを、涼しい顔で」

年老いた爪が、腕でかばいきれぬ頬や額をかすめ、無数の掻き傷を作った。

「聞け」

床に突っ伏している五瀬の髪を、国麻呂はわしづかみにつかんだ。すさまじい勢いで頭を引きずり上げ、ぐいと顔を寄せた。見下ろす目は黄色く濁り、小刻みに震えていた。どす黒くなった唇の端から唾液がしたたった。

「葦原の国衙に、朝廷の使いが参ったのだ。使いの申すには来年、宮中にて献上の儀が執り行われる」

「」

「金は、その儀に間に合わせ献上せねばならぬ。朝廷の厳命じゃ。何としても献上せねばならぬのだぞ。それを、今になって、櫛根のあれは金ではございませんでしたなどと、左様なことがとおると思つてか」

声はしだいに甲高い金切り声となり、終わりの方はほとんど聞き取ることすら出来なかった。国麻呂はいつとき、ひきつけのように体を震わせたと思うと、汚いものを捨てるように、五瀬の体を突き飛ばした。

「わしは、死罪じゃ」

咽を痙攣させ国麻呂は低いうめき声を発した。

「いや、わし一人では済まぬ。朝廷をたばかったのじゃ。謀反の刃

を向けたに等しい。一族ごとごとく、死を賜わらることになる。対馬の家は終いじゃ。」 雑戸

両の目を燃え立たせ、国麻呂はその言葉を憎しみと共に吐きかけた。

「 雑戸、お主のような者とかかわったばかりに、わが一族はいえねばならぬ。雑戸はやはり賤じゃ。穢れと災厄の宿る者じゃ。出て行け。その卑しい顔を二度とわしの目に晒すな。今すぐに出て行け」

ぼんやりと、五瀬は立ち上がった。命ぜられるまま扉を両腕で押し開け、屋敷を出るとあとは訳も分からずに走った。気がつくとき、屋敷裏に広がる叢林の奥に呆然と立ち尽くしていた。

衣の胸元が血で汚れていた。顔に手をあててみるとべっとり鼻血がついた。蹴られた時に沓先が当たったのだった。衣を脱ぎ、そばに流れていた細流に浸した。水をすくって顔を洗った。蹴られたはずの鼻は痛まなかった。その代わり、国麻呂の口から吐きかけられた、雑戸、という一言が耳に鋭い爪のように食い込み、全身が切るように痛んだ。頬に手をあてて、五瀬は両の目から涙がたつていることに、初めて気がついた。

第六章 金の正体（三）

* * * * *

数日ののち、五瀬は国麻呂に呼び出され、金の一件を誰かに洩らしたかどうか、問いただされた。

「誰にも話してはおりませぬ」

「広兄や、その家部宮道とやらはどうだ」

五瀬は首を振った。国麻呂はとりあえず興奮は鎮めたらしく、深山の古木の如き落ち着きを取り戻してはいたが、五瀬に向けられる目の冷たいことは相変わらずであり、それが嫌さに五瀬は国麻呂の顔を見ぬようにしていた。

「椎根に付けてやったわしの家人や兵に、ちらとでも怪しげなことは言わなんだか。よくよく考えよ。ついつつかり忘れたでは済まぬぞ」

「確かに申しておりませぬ。ただ、あの、三船は存じておりませんが」

思い出して五瀬は答えた。三船と名を聞いても、国麻呂は何者か分からぬ様子であったが、工房を手伝っている奴婢と知ると、そうかと、関心がなさそうに頷いた。

「追って沙汰する」

五瀬は部屋から追い出された。

国麻呂から二度目の呼び出しがあったのは、それから半月あまりたったある日であった。家人が訪れた時、五瀬はちょうど小屋の修理をしていた。屋根の一隅から雨が入るようになったため、三船に手伝わせて萱をふき直していたのだった。

「あとはわしがやっておこう」

三船は五瀬の手から道具を受け取った。

「すまない」

家人がせかすために、五瀬はそんな簡単な一言だけを言い置いたきり、屋敷へ向かった。案内された扉を開けて、五瀬はぎよつとして立ちすくんだ。部屋の奥に、狐のように細長い顔が立っていた。しまのつかさ たぐちのあずまひと嶋司、田口東人であった。国麻呂はと見れば、隅の方に立っていた。両腕を後ろ手に組み、こちらに向けた横顔には表情がない。自分がどのような状況に置かれたのか、五瀬はそこからは読み取ることが出来なかった。音を立てて、背後に扉が閉ざされた。

そつと、五瀬は部屋を見回した。四人の人間が、五瀬を取り囲んでいる。田口東人と国麻呂、それから背後には兵士が二人、刀を帯びて扉を固めていた。東人が床を踏み鳴らした。はつと向き直った五瀬に

「工房を厳原に移す。今すぐ仕度せい」

短く、東人は命じた。はらわたをつかまれるような、底力のある声だった。

「工房」

命じられたことの意味が呑み込めず、五瀬は思わずおうむ返しに訊き返した。対馬では金が産出されないことが分かった以上、精錬事業は破綻したはずである。いまさら工房を動かすことにどのような必然性があるのか……。問うような視線をちらと国麻呂の方へ送ったが、彼は無然として、硬い表情の横顔を見せているだけである。

戸惑い、しかし次の一瞬、肉体の芯の部分に、刃が貫いたような戦慄が走った。

「あ、貴方様は」

突っ立ったまま、五瀬は咽を震わせた。

「まさか、偽りの金を帝に」

「口を慎め、雑戸」

東人が怒鳴った。部屋がびりつと震えた。

「お主に許された返答は首を縦に動かすことだけじゃ。余計な口をきくことは許さん。ましてや否いなやなど許さぬ。巖原で、献上する金を錬るのだ。これはわしの命ではなく、言うなれば大納言、大伴御行様の命と思え。大納言様に逆らうことになるのだぞ」

大納言がどういふものかなど五瀬は知るはずもない。しかし、飛鳥の工房で、典鑄司の役人に何かとってはおどされ、殴られ、また鞭打たれて来た五瀬の体には、朝廷というものへの恐れが深く刻

み込まれている。大納言とやらに逆らうことになるのは、確かに恐ろしかった。しかし大納言、ひいては帝をたばかりのは、それ以上に恐ろしかった。ひきつった息の音が部屋に流れた。肩が大きくあえぎ、冷たい汗が胸をつたった。長い時が流れ、五瀬は恐る恐る、重い口を開いた。

「で、出来かねます。我には、左様に、大それたことは……」

答えた途端、兵士が背後から飛びかかり、五瀬は床に突き倒された。二人がかりで床に四つん這いにさせ、両手を押さえつけた。東人が歩み寄って来た。手を伸ばし、兵士の腰から刀を抜き放った。刃先で五瀬の蒼ざめた顎をすくい上げ、上を向かせた。

「殺すと思うたか。案ずるな、殺しはせぬ。否やと申すのであれば、この場で両の手首を斬り落としてくれる。手がなくなつてはもはや鍛冶の仕事は出来ぬ。田畑を耕すこともままならぬ。乞食になつて一生、投げ与えられたものを犬のように這いつくばって食い、生きることになる。それを望むか」

東人は笑った。おどすというより、地を這いずり回る五瀬の姿を描き、愉しんでいるようであった。

五瀬の全身が震えた。しかしそれは恐怖ではなく湧き上がった怒りのためだった。食いしばった奥歯がぎりぎりと言を立えた。この男はどこまで人を貶めれば気が済むのか。ならば手を斬らせてやる。五瀬は首を精一杯にねじって東人の目を見据えた。だが、この男の望むように這って生きはせぬ。手がなくとも自らの命を絶つ術は幾らでもあるのだ。五瀬の目に、すさまじい憎悪がにじみ上がった。東人の顔から笑いが消えた。その時

「五瀬」

いきなり、肩に手がふれた。不意を突かれ、五瀬ははっとそちらを見た。国麻呂であった。ほんの少し前まで、国麻呂は五瀬をこうして名で呼び、親しみ深く語らってくれたはずであった。しかしその記憶は五瀬の中で既に遠い。思いがけず名を呼ばれて、五瀬の心は動揺した。

「五瀬。黙って、命に従え」

国麻呂の手が、なだめるように肩をさすった。

「金の献上は、もはやわしらだけではどうにもならぬところまで進んでおる。樫根の金が偽物まがぶつであったとて、それを正直に語って済むことではない。そしてお主と、わしと、嶋司様と、この三人が口をつぐめば事は決して露見はせぬ。咎を受ける恐れはない。頼む、命に従って、金を作ってくれ」

国麻呂の口調には、五瀬を蹴りつけ雑戸とののしった時のすさんだ色はなかった。聞き慣れた静かな声が耳に染みた。

五瀬はじつと国麻呂を見た。国麻呂の、偽りの心を見た。五瀬には分かつていた。今まで国麻呂が示して来た温情はことごとく偽りであった。国麻呂が親しみを向けて来たのは五瀬そのものではなく、五瀬の手が生み出す金であり、金の献上によって朝廷から与えられる褒美であった。

しかし、五瀬はこの鶏知くんのつかさで初めて、人らしい扱いを受けた。しかも村人ばかりではない、郡司くんのつかさというれっきとした身分の国麻呂までもが、五瀬に人として接してくれたのだった。その厚情に対する恩

義の思いは、五瀬の心を深い所までむしばんでしまっていた。国麻呂の、あたかも以前と変わらぬ穏やかな声にふれ、それが装った温もりと知りつつも、張りつめていた五瀬の心はばらばらと崩れた。五瀬は唇を噛みしめ、力なくうなだれた。

五瀬が使っていた小屋や工房は、国麻呂の方で取り片づけるといふ。とにかくすぐさま身の周りのものをまとめ、まとめしい蔵原へ向かうようにと、五瀬は命ぜられた。

戻ってみると、小屋には既に国衛の兵士が来ていた。が、萱を直しているはずの三船の姿はどこにも見えなかった。先程五瀬が手渡した道具が地面にぼつんと置かれてあった。

「おい、ぼんやりするな。さつさと荷を造ってしまえ」

五瀬の顔を見つけるなり、兵士がどやしつけた。

「ここに奴婢が一人、おつたはずですが」

「おつたとも。それが如何した」

「あの、その者は、何処へ」

「お主は知らんでもよい。無駄口をたたく暇があったら仕度をせい」

「お待ち下され。工房を移すのであれば、あの奴婢も伴うて参ります」

五瀬は慌てて訴えた。

「あれは私の助手にございます。金の仕事には、いりような者です。それに、あの三船と申す奴婢は嶋司様よりお借り致したものでございませぬ、粗略には出来ませぬ。何卒、今一度ここへ」

「やかましいぞ。口をつぐまんか」

兵士はいらいらと怒鳴った。

「お主にわざわざ言われんでも承知しておるわ。あの奴婢の処分は館様より下知されておるのだ。お主ごときが気をまわすことではない。よいか、言うのはこれきりじゃ、口を閉じて荷を造れ」

斬りかからんばかりの剣幕に、五瀬は取りつく島もなかった。仕方なく、黙って小屋に入り身の周りをまとめ始めた。持ち物といつてもわずかなものである。仕事道具が一式、手斧や鉞つちの類、広兄から貰った綿布の衣、椀や鍋などの食器。長いこと、飯は共に済ませる習慣であったため、三船の椀も置いてある。椀を手に五瀬はやるせなくため息を洩らした。三船に一言の別れも言えぬままに発たねばならぬのが、あまりにも心残りであった。

包み一つを手に小屋を出ると、急に起こった騒ぎを聞きつけた屋敷の者たちが、裏口からこわごわと顔を覗かせていた。その中に、折から親しくしていた家人の顔を見つけ、五瀬は大急ぎでその者をそばに差し招いた。

「お主」

早口に囁いた。

「おれは嶋司の命で急に巖原に行くことになった。三船が戻ったら

伝えてくれ」

「鍛戸殿、あの者は……」

家人は何事か言いかけたが、兵士のいらだつた手が後ろから五瀬の腕をつかみ荒々しく引き離した。こわばった家人の顔が遠のき、声は断ち切れた。咎人のように兵士に両脇を固められ、五瀬は郡衙を出た。葭原に向かう船に押し込まれて慌しく鶏知を去っていく五瀬を、海辺に散らばった驚きと好奇の目が見送った。

（第六章・了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5811s/>

鍍金の島（ときんのしま）

2011年11月7日11時07分発行